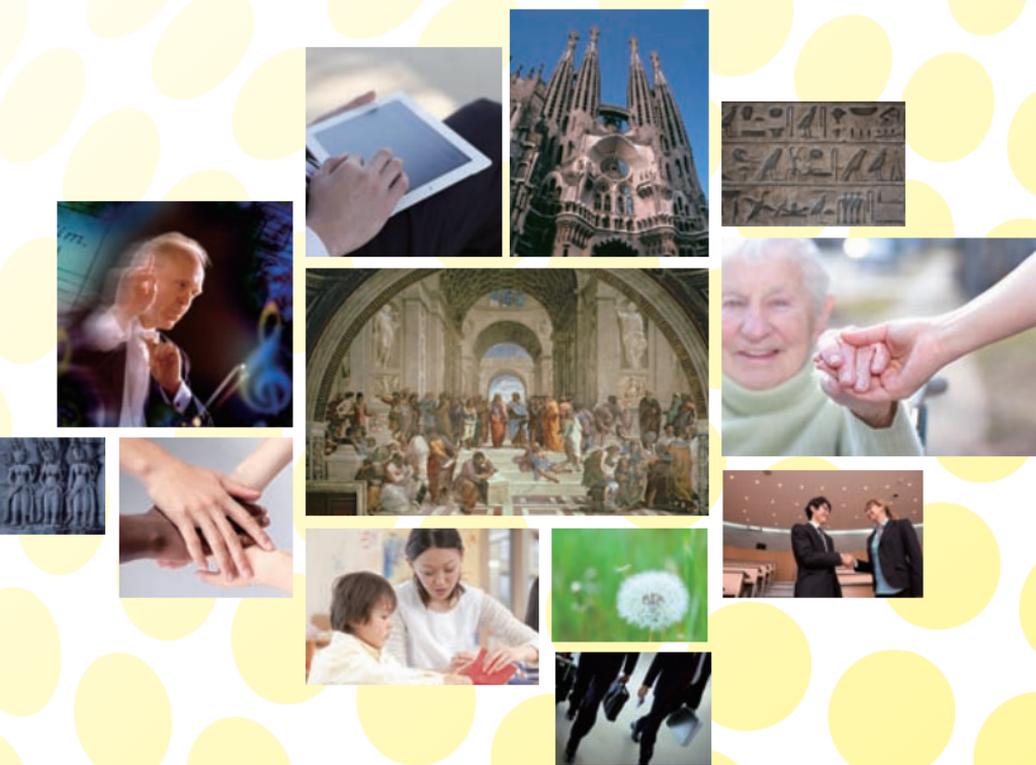


グローバル時代の教養

Celebration of 25th Anniversary Symposium Report



Nagoya University of Foreign Studies
名古屋外国語大学

名古屋外国語大学創立 25 周年
記念シンポジウム

はじめに

ソチ五輪開幕の日、私は、名古屋外国語大学のインターナショナルハウスで、20名近い留学生たちとのライブビューイングに加わっていた。開会式が始まる直前、私は彼らに向かって次のように挨拶した。

「ロシアはこれまで、様々な歴史的な試練に見舞われてきた。1980年のモスクワ・オリンピックは、アフガン侵攻をきっかけに西側にボイコットされ、91年には、自分たちの国が減じるという辛い経験もしている。その悔しさから立ち上がった元気な姿を世界に示したいと、彼らは願っている。単なるお国自慢ではなく、今という時代のロシアの力をどう客観的に世界に示すのか。最終日までしっかり見守りたい」

開幕式の冒頭で、キリル文字によるアルファベットが次々と紹介されたとき、私は思わず、歓声を上げた。Дの文字では、ドストエフスキーが、Чの文字では、チャイコフスキーが紹介されたからだ。ロシア人は、どれほど自国の文化を愛し、それを世界に誇りたいと願っていることか、その粋な思いが伝わってきた。キリル文字のおかげで、開催国ロシアと日本(Япония)の旗が並ぶに至ったのは、とても名誉なことのように思えた。日本のロシア語名の頭文字はЯ、アルファベットの最後の文字である。今回の五輪には、むろん、少なからず批判もあった。ロシア人の意地のようなものが随所に顔を出す大会で、英語が通じないという不満もその一つである。しかし私自身は、英語を必死に話そうとする若いボランティアたちの献身的な姿に好感を持った。テレビの画像に映し出された競技会場では、まさに多言語が響きあうポリフォニーの空間が現出していたが、巨大なソチの会場を歩きながら耳にしていたのは、ロシア音楽の豊かな旋律と、まさにロシア語の豊穡といえる響きである。



ソチ五輪が無事閉幕しようというとき、隣国ウクライナで「革命」が勃発した。早朝のソチの空港で搭乗を待つ間、ソチとウクライナの位置関係はどうなっているかを確認しようとグーグルマップを開き、目を疑った。ウクライナ、ロシア、グルジアの三国が隣接する黒海東岸の地図は、それぞれ原語で表記されている。グローバル化の流れは、人間の意識の深部をすさまじい勢いで押し開き、民族主義というパンドラの箱を開いた。ウクライナでは、やがてウクライナ語圏とロシア語圏に分断される時が来るかもしれない。まさに恐るべき矛盾である。閉幕を待たず、西側の多くの特派員が、ソチからウクライナの首都キエフに次々に駆り出されていった。オリンピックと「革命」で、ロシア語の通訳が払底しているという話も聞いた。現場のホットニュースは、英語では追えきれない。逆に、ロシア語さえわかれば情報収集に事欠かず、あとは健全な判断力で何とでもなる。思うに、この判断力こそが、教養と名づけられているものの本質なのではないだろうか。

世界という名の舞台では、日々、主役が入れ替わっている。私たち大学人は、これから世界に向けて個性ある人材を送り出していかなくてはならない。海外で働くジャーナリストは、まさに最高のグローバル教養人である。私が、「世界教養」(World Liberal Arts)の名でイメージする究極の人材像がそこにあるような気がする。しかし、もはや呼び名はどうでもよい。大切なのは、自分のナショナルリティを客観化できる知性であり、他者に共感しつつ、なおかつ自分自身に止まりうる力を持った人間である。それこそは、人間に課せられた永遠の課題であり、むしろ、私自身が最終的に手にしたいと願いつづけている一つの理想的な知性の姿でもある。

名古屋外国語大学長 亀山 郁夫

概要

名古屋外国語大学創立25周年記念シンポジウム



“WORLD LIBERAL ARTS”の地平へ グローバル時代の教養

2013年11月30日(土)

開場13:00/開演14:00

14:00～ 開会あいさつ

名古屋外国語大学長 亀山 郁夫

14:15～ 基調講演

21世紀のグローバル世界は教養とともに成熟する

東京大学大学院人文社会系研究科教授 沼野 充義

15:15～ 休憩

15:30～ パネルディスカッション 五十音順、敬称略

東京大学大学院人文社会系研究科教授 沼野 充義

中日新聞社代表取締役社長 小出 宣昭

京都三大学教養教育研究・推進機構 林 哲介

司会: 名古屋外国語大学長 亀山 郁夫

17:00～ 閉会

会 場	名古屋国際会議場 白鳥ホール
主 催	名古屋外国語大学
後 援	文部科学省、中日新聞社
参加者総計	301名



Contents

- 01 レポートの刊行に寄せて
- 03 概要
- 05 シンポジウム出演者プロフィール
- 07 開会のあいさつ
名古屋外国語大学長 亀山 郁夫
- 09 基調講演
東京大学大学院人文社会系研究科教授 沼野 充義
- 28 パネルディスカッション
- 44 質疑応答
- 49 Essay



シンポジウム出演者プロフィール



亀山 郁夫

(かめやま いくお)

名古屋外国語大学長

1972年東京外国語大学卒業、1974年同大学院修士課程修了。1977年東京大学大学院博士課程中退。1982年天理大学助教授、1987年同志社大学助教授、1993年東京外国語大学教授、2007年東京外国語大学長を経て2013年4月から名古屋外国語大学長に。ロシア文化やロシア文学を研究し、主な著書に「破滅のマヤコフスキー」「碟のロシアスターリンと芸術家たち」。翻訳書にドストエフスキー著「カラマーゾフの兄弟」など多数。



沼野 充義

(ぬまの みつよし)

東京大学大学院人文社会系研究科教授

1985年東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻博士課程）単位取得満期退学。1985年ハーバード大学大学院スラブ語スラブ文学専攻博士課程単位取得・博士論文提出資格取得。1984年ハーバード大学大学院教授助手（TA）、1987年ワルシャワ大学東洋学研究所講師。2004年東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授。2007年4月から東京大学大学院人文社会系研究科・文学部に新設された現代文学論研究室主任に。専門分野として近現代ロシアおよびポーランド文学、現代日本文学を視野に入れた世界文学論。著書に『徹夜の塊』（2002年、サントリー学芸賞）、『ユートピア文学論』（2003年、第55回読売文学賞）ほか多数。



林 哲介

(はやし てつすけ)

京都三大学教養教育研究・推進機構

1966年京都大学理学部物理学科卒業。1972年京都大学助手、1981年米国ロチェスター大学研究員、1986年京都大学助教授、1992年、京都大学教授、2005年京都大学副学長就任。2006年星城大学長、2010年京都工芸繊維大学副学長、2013年京都三大学教養教育研究・推進機構専門分野として物性物理学・大学教育論。近著に『教養教育の思想性』（2013年）ほか多数。



小出 宣昭

(こいで のぶあき)

中日新聞社代表取締役社長

1967年早稲田大学卒業。ロンドン特派員、名古屋本社社会部長、同編集局長、東京本社代表などを歴任。2011年中日新聞社社長に就任

開会のあいさつ

名古屋外国語大学長 亀山 郁夫

本日ここに名古屋外国語大学創立 25 周年を記念するシンポジウムに、多数ご参集くださいまして、心から御礼申し上げます。

名古屋外国語大学は 1988 年、昭和 63 年に、中部地方唯一の外国語大学として開学いたしました。同年1月の、ゴルパチョフ書記長によるベレストロイカの開始にも象徴されるように、時代全体がまさに大きく変貌を遂げていく幕開けの時期でもありました。

本学はその後、時代や社会の要請を踏まえ、学部学科の新増設、大学院国際コミュニケーション研究科の新設を重ね、本年4月には現代国際学部国際教養学科を設置するにいたりました。そして今日では中部地区唯一の外国語大学として、文字通り、インターナショナルキャンパスとしての装いを整えつつあります。名古屋市の郊外、日進の街の小高い丘に位置する本キャンパスは、世界各地から来た留学生との日々の交流を通じ、チャレンジ精神に溢れた若者たちが、目を輝かせてキャンパスライフを送っています。他方、本学は同じ丘の上に立つ姉妹校である名古屋学芸大学とも手を携え、より広い学びの空間を生み出すべく努力を重ねているところであります。

名古屋外国語大学の数ある特色の中で、特に優れていると自負するのが、少人数による外国語教育と留学制度です。外国人教員1人に、学生3人というシステム「パワーアップチュートリアル」、略してPUT。留学費用の全額支援制度。ウォルトディズニー研修を含む中部地区唯一のUCR、カリフォルニア大学リバーサイド校への特別留学。また、日本人学生と外国人留学生との合同授業など、外国語や世界のさまざまな地域の文化を学ぶ上で、申し分のない環境が整っております。社会的にも「留学に強い名古屋外国語大学」との高い評価をいただいております。採用実績では中部地区で第1位を占めるなど、本学における外国語教育は、ますます大きな花を咲かせようとしております。

しかし、このまま現状に安住することは許されません。本学が魅力ある高等教育機関として、中部地区から日本全国に向けて、より広くプレゼンスを



発揮していく必要があります。他の大学と同様、学部学科の再編、カリキュラム改革、多様な進路選択に対応した、きめ細かなキャリア教育の充実、喫緊かつ継続的な課題であります。今後の社会や世界を展望しますと、グローバル化の急速な進展がもたらす社会の変化によって、多くの若者が将来への不安を感じ、自信を失っているようにも見受けられます。大学は、そうした若者たちが希望を持って将来における自らの行動の指針を形成できる力を養う必要があります。そして、それこそが大学に課せられた任務であると認識するところです。論理的な思考はもとより、日本人としてのしっかりとしたアイデンティティ。さらに共感力、エンパシー。そして何より、豊かな教養に裏打ちされた専門的な知識をしっかりと相手に届けることのできる語学力を備えた人材。これを育てたい。それが私たち名古屋外国語大学の願いであります。

さて、かねてより教養教育の危機が叫ばれ、その重要性が強調されていますが、その内容は論者によって異なり、百家争鳴の感さえあります。「グローバル時代の教養」と題された今日のシンポジウムでは、現在急速に進展しつつある世界のグローバル化と、さらにその先を展望しつつ、あらためて外国語大学の使命を世に問うと同時に、世界を舞台に活躍する人材育成のために何が求められているのか、また、限りない多様性の中で中心が見失われる現在において、人間形成の要ともいえるべき教養教育は どうあるべきか、広く議論していきたいと思います。講演者には、現代の日本を代表する批評家の一人であり、スラブ文化研究の第一人者である東京大学大学院教授の沼野充義さん。また、シンポジウムのパネラーとしては、中日新聞社代表取締役社長であり優れたジャーナリスト、かつ、オピニオンリーダーである小出宣昭さん。元京都大学副学長、前星城大学学長であり、現在は京都三大学教養教育研究・推進機構の林哲介さんという、そうそうたる方々をお招きすることができました。最後まで、じっくりと、私たちの議論を見守っていただけたら幸いです。

最後に、創立 25 周年の大きな節目を機に、名古屋外国語大学教職員一同、気持ちも新たに、教育・研究・地域貢献に全力を尽くしてまいり所存です。何卒、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願ひ申し上げます。本日は誠にありがとうございます。

基調講演

東京大学大学院人文社会系研究科教授 沼野 充義

ただいま過分なご紹介にあずかりました沼野です。これから、少々退屈な話になるかもしれませんが、どうかしばらくご辛抱いただければと思います。

今日の話は「21世紀のグローバル世界は教養とともに成熟する」ということですが、これはどちらかというと亀山学長が付けてくださったタイトルで、私は別にそれに背くつもりはないのですが、果たして、このタイトル通りになるかどうか、お聴きいただければと思います。



スライドの中身に沿ってお話したいと思いますが、今日いずれにしても一番中心のキーワードになるのは「教養」ということです。

教養というのは、既に崩壊しているのではないか、という認識があります。それはもちろん、教養というものをどのようにとらえ、どのように定義するのかわかりませんが、少なくとも我々の世代が考えていた教養というのは、今では無くなってしまっているような気がします。そういう場合の教養というのは、得てして古典的な教養ですね。ヨーロッパで教養というと、古典ギリシア、ローマの教養ということになります。今ではそんなものも無用の長物であるという考え方は、結構出てきます。

例えば、亀山学長は特にドストエフスキーの研究・翻訳で有名な方ですが、現在、日本におけるドストエフスキーブームの再来というものは、亀山先生の業績に負うところが非常に大きいんです。東大生の中でも「ドストエフスキーって誰ですか」と、真顔で聞くような学生が最近増えてきました。下手をするとロシア文学専攻の学生にもいたりします。昔の怖い先生でしたら「おまえ、そんなことも知らないのか？ 顔を洗って出直してこい」と怒鳴りつけるようなところなんですが、今そんなことをしたら学生が誰もいなくなってしまう。

古典的な読書に関する教養については、日本では我々の世代ぐらいまでは、やはり昔の教養趣味というものを引きずっているものがあります。大正教養主義といわれる時代があり、その時代に一世を風靡したのが哲学者、阿部次郎という人の『三太郎の日記』という本です。これは今でも手に入

り読むことができますが、さすがに今これを愛読するという人はめっきり減ってしまったようです。この『三太郎の日記』では「我等は我等の教養を釈迦に、基督に、ダンテに、ゲーテに、ルソーに、カントに求むることに就いて、何の躊躇を感ずる義務を持っていない」というようなことを言っています。要するに、アジアのお釈迦様も入っていますが、ダンテ、ゲーテ、ルソー、カント、こういったものが教養であって、こういったものを読むのが当たり前であるということなんです。これは旧制高校的な大正教養心であります。ちなみに阿部次郎の一高の同級生には岩波茂雄という人がいましたが、岩波茂雄は岩波書店の創設者であります。

しかし、こういった教養というのは、今、科学技術が発達して世の中がコンピュータビジネスの時代である、そういう時代にあって、どうも無用の長物になりつつあるのではないかというような感じもします。ただ、おそらくどの時代にあっても、若者は一定の知識というものは持っているはずで、今の若者が昔の若者よりも脳みそが軽くなったというふうには考えにくい。つまり、今の若者はひょっとしたら知っていることはたくさんあるが、それは違うことかもしれないわけですね。

例えば、今の若者にとってスマホを使いこなせる能力の方が、ドストエフスキーを知っているということよりも、はるかに大事であるかもしれない。ということは、何を意味するのかというと、ちょっと耳慣れない言葉を使いますが「共通知」。共通の知ですね、その枠組みが実は時代とともに変化している。これは確かだと思います。

次に、教養とはそもそも何なのか、この言葉は何を意味するのかを前提に考えていきたいと思えます。辞典を見ますと、教養に主に3つの意味が載っています。「教養育てること、教育」。これは漢字を見ても分かる通り、これが本来の意味ですね。2番目「学問知識などによって養われた品位、教育勉学などによって蓄えられた能力、知識、文化に関する広い知識」。どうもこれが現代で我々が言う教養に大体該当するようです。3番目にちょっと違う意味がありますが、これは今では普通に使う意味ではありませんので省略します。ちょっと注意していただきたいのが、現代の我々が教養という場合、イメージしているものは2番目の定義ですが、実はこれ、昔から使われている用法ではないんですね。これは恐らく、先ほど引用した阿部次郎の『三太郎の日記』あたりが最も早い、この意味での教養の使用例ではないかと思われます。『三太郎の日記』を見ると、教養という言葉が出てきたところに、カッコで「文化的知識のこと」と書いてあります。つまり、当時教養はそういう意味ではあまり一般には使われていなかった、英語のカルチャーとか、

ドイツ語でビュードゥングと言いますが、そういった言葉の訳語として、意図的に教養という言葉を用いている、そういうことを、どうもこういう注記は示しているように思います。

では、この教養を、ヨーロッパの言語、例えば英語で何というのかというと、実はなかなかぴたりする言葉が思い浮かばないのではと思います。強いて言えば、広い意味ではカルチャーという言葉で教養とらえて当てはめることができます。カルチャーというと、普通は「文化」と頭の中で訳してしまつて、ちょっと高級なセンスの良い音楽であるとか、日常生活と関係の無いようなそういうものを思いがちなのですが、このカルチャーという言葉は、ヨーロッパの他の言語でも多く使われていますが、元来の意味は「耕して育てること」です。それが転じて「人間の精神を耕すこと」という意味になり、「心の耕作」さまざまな教養を身につけて心豊かにしていくと、そういう意味で使われるようになりました。ラテン語では、クチュラアニミという言い方があり、「魂の耕作」「魂のカルチャー」という意味になります。これは古代ローマのキケロという人が、最初にこういう言い方をしたといわれています。

しかし、どうも教養を表すのがカルチャーという言葉だけでは、何となく大学の教養課程で文化、カルチャーを教えているだけなのかということになり、まだ何となくピンと来ません。リベラルアーツという言葉がかなり教養・教育の意味でよく使われていますが、こちらの方が大学という組織にとっては関係が深いということになります。

このリベラルアーツという言葉の起源、その制度の歴史ということについては、詳しく書いてある本がたくさんあります。もともとこのリベラルアーツというのは、ギリシア・ローマに理念的な源流を持っていますが、ヨーロッパの大学制度で中世以降、自由な人間の持つべき技芸の基本とみなされました。アーツは芸術と思いがちですが、ここでいうアーツというのは技能、技芸全般を指し、実践的な知識・学問のことになります。自由な人間の持つべき技芸の基本、これがリベラルアーツです。これがもともと7科あり、自由7科などと言いましたが、昔の中世のことですから今の我々が考えるものとはちょっとかけ離れたところがあります。文法学、修辞学、論理学、これらは主に言語にかかわる3科。それから数学に近い分野では、算術、幾何学、天文学、音楽、音楽が入っているのがなかなか面白いところで、これが4科、合わせて7科。しかもその7科を統合する形で、その上に哲学というものも立つということです。これらが今でいうリベラルアーツの起源となります。

13世紀のヨーロッパで大学ができたときには、さらにより深い専門的な知識が必要だとして、神学、法学、医学という分野がありました。これらの神

学部、法学部、医学部に進んでいくために、その前に習うべき科目として、これらのリベラルアーツというものが正式に定められたわけです。現代ではリベラルアーツというと、学部課程の基礎諸分野、人文、自然、社会などになります。それも専門レベルまで深めない、最初の基本的な諸分野を指すということが普通になっています。

実は、アメリカでは四年制の学部機関、そこでリベラルアーツを重視して教える大学がかなりあります。これはリベラルアーツカレッジと呼ばれるものです。そして、その上に専門的研究をする大学院を置くのが、アメリカのシステムとなっています。つまりリベラルアーツカレッジという場合には、大学院を持たない、比較的こじんまりとした大学、ユニバーシティというより、カレッジということになります。こじんまりとした大学ですが非常にレベルが高く、有名な人材をたくさん輩出しているところがあります。例えば、マーストとかウィリアムズカレッジとか、それからウエズリアンカレッジとか、そういった大学がいわゆる典型的なリベラルアーツカレッジです。

しかし、どうもこの日本の大学における教養教育というのは、今危機に瀕しているという感じがします。一つには1990年代初頭、文部省の方針によって大学設置基準の大綱化というものが導入されました。この大綱化というのはちょっと不思議な言葉なんですが、要するに大学設置基準を緩和して簡単にしようという話です。しかしその結果、大学における教養課程などが非常に激減してしまい、見方によっては壊滅状態になってしまったということがあります。確かに、先ほど言った『三太郎の日記』に見られるような古典的な教養主義というのは、もう今の世の中にはあまり役に立ちそうにないのは、これは誰しも認めるところであります。現代のグローバル化した世界にあって、一体どのような教養が必要なのか。教養が必要でないということは絶対はないと思いますが、新しい大学でどのような教養を教えるべきなのか。むしろ今日、教育そのものを大学という枠の中で消滅させる方向になって今に至っているというのが大きな流れです。しかし、それはやっぱりまずかったのではないかとということで、皆さんが新しい教養、教育を求めて、新しい道を探っているところでもあります。名古屋外国語大学の学長に就任された亀山先生もまさにその方向で、新しい教養のあり方というのを非常に意欲的に考えられている一人であります。

例えば、今新たにリベラルアーツが必要だとしたらどんなものなのか。それについて参考になるのが、吉見俊哉さんという社会学者が、岩波新書の『大学とは何か?』という近著で書かれていることです。ちなみに、吉見俊哉さんは社会学の研究者として第一線の学者ですが、現在の東大の

濱田純一総長のいわばプレーンの一人として、副学長も務められた方です。吉見さんの言っていることを引用しましたが、ちょっと読んでみます。「このような状況に必要なのは、古典や教養を復活させるのではない仕方で、リベラルな知を追究していくことであるように私には思われる。専門知と対立し、それと隔絶する次元にリベラルアーツを復興するのではなく、高度に細分化され、総合的な見通しを失った専門知を結び合わせ、それらに新たな認識の知平を与えることで相対化する、新しいタイプのリベラルアーツへの想像力が必要なのだ」。まさに正論であろうと思います。それでは今のグローバル時代に、どのような新しい教養、教育、あるいはリベラルアーツと言ってもいいのですが、それが必要なのか。具体的にいくつかの点について考えたいと思います。

最近どこに行っても聞こえてくるのが「英語は重要である、大事である」ということ。「日本では中学、高校、大学と9年、下手したら13年ぐらいいも英語を習っているのに、全く日常会話もできない。もちろんビジネスなどでは全くゼロといってもいいくらい何も役にも立たない。それしか日本人は英語ができないって、いったい英語教育ってどうなっているんだ」ということは、昔から散々言われてきました。言われてきた割には、何も変わっていないというところもある。では、英語をどうしたらいいのかということですね。

現代の世界ではますます、事実上、国際共通語あるいは普遍語となった英語という状況がはっきりしてきました。はっきり言って英語を知らなければ国際的な活動はほとんど不可能であると、どんな分野でも言えます。私の専門の一つとしてロシア文学やポーランド文学の領域でも、英語による国際会議がどんどん増えております。ロシア文学の専門家でも英語で発表するとかですね。先日、ポーランドのクラフフの日本学研究学会というところに招待され行ってまいりました。そこではポーランドの日本学者たちが、仲間同士でさえも英語で討論し発表していた、そういう場面もありました。このままだと、日本の国文学者が外国語の学会に引っ張り出されて、英語で話せと言われるようになると思います。現状では日本の国文学のいくら偉い大学の教授であっても、英語がすぐに使える人はほとんど事実上ゼロに近いと言っていると思います。こういう状況では、結局英語だけが幅をきかせて世界で使われ、例えば日本語やフランス語のような、一時は国際語に準じた存在であるものまで、その国でしか通用しない国民語、ナショナルランゲージという扱いになって、このままだとひょっとしたら滅びるのではないかというような危惧さえ抱く人が出てきました。その典型が水村美苗さんという、大変優れた作家です。数年前に『日本語が亡びるとき』というタイトルからして大変ショッ

キングな本を書き、かなり話題になりました。彼女によると、英語というのは既に世界の普遍語になっているといいます。その圧倒的な力の下で我々、例えば日本人にとって自分たちのナショナルランゲージ、自分たちの国民語である日本語で書かれた国民文学というものは、このままだと滅亡してしまうのではないかと。日本で頭のいい才気のある感情の豊かな若者は、これから日本語なんてものを使ってモノを書くのはバカらしいからやめる、という時代が来るのではないかと。そこまではいかないと私は思うのですが、水村さんは割とまじめにそこまで考えています。水村さんは日本近代文学を深く愛する人なので、日本語で書かれた近代文学は文化的な巨大な遺産なので、それを守るための教育を通して日本語を守るべきだと主張しています。

こんなことを言うと、水村美苗という人はよっぽど英語の嫌いな、あるいは英語が不得意な人なんだろうと思われる方がいるかもしれませんが。得てして英語に文句を言う人は、自分が英語ができない人である場合が多いのですが。逆に、英語を中心に国際化をしようと語る人は、大体英語が得意な人、あるいは得意だと思っている人ですね。そういう傾向がどうしてもありますが、実は、水村さんは10代の頃から20年ぐらいアメリカに行って、プリンストン大学でフランス文学の博士課程まで修了している人です。英語と日本語をほぼ完璧にバイリンガルとして使える人なんですね。そういう人がここまで言うという、世界はそういう状況になっています。水村美苗さんは、専門としてはフランス文学なんですけど、フランス人というのはご存じのように非常に自国の言語を愛する。ちょっと中華主義的なところもあるくらいの人たちなんですけど。水村さんの話によると、フランスで行われたフランス文学に関する国際学会においてさえも、フランス人が英語で報告をしなければいけない事態が今生じているそうです。これは少し前では全く考えられなかった事態なんですね。このままではひょっとしたらフランス語も、国際的に通用する言語という意味では滅びてしまうであろうと。そういう危惧を水村さんは抱いています。

こういった構図が現代の世界であるわけですが、どうしてそれほど世界で英語が使われているのに、日本では英語ができないままなのか。なぜこんなに取り残されたままで、日本はそれなりに発展してきたのか。少しこれも歴史を考えてみましょう。

実は、日本人のことだけでなく、物事というのは何でも時代とともに発展していくとは限らない。人文学的な知のあり方というのは後退、退化する場合があります。日本人は、明治時代にはものすごく英語ができたんです。もちろん全部の人ではなく、人口のほとんど一握りですが。明治時代の知識人は、今の知識人が平均的にできる英語より、はるかに高いレベルの英語を

習得していました。日本人であれば、誰でも名前ぐらいは知っている、こういった有名な本があります。岡倉天心の『茶の本』、新渡戸稲造の『武士道』、内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』。内村の本に至っては、今の学生にまずタイトルが日本語で読めないのではないかと思います。実は皆さん、ご購入の方は大体ご存じかと思いますが、これらの三冊の本は日本語で書かれているわけではないんです。全部英語で書かれているのです。つまり、明治時代の知識人は自分たちのことを世界に発信するために、自ら非常に立派な英語で本を書くことさえできた。世界的にも広く読まれて、大きな影響を与えた本です。しかし、こういった人たちが排出した後、英語力は明らかに日本の知識人の間では退化したように見えます。どうしてそんなことが起こったのか、次のスライドにその答えが書いてあります。

これはそんなに複雑な話ではございません。夏目漱石はイギリスに国費留学した、日本ではイギリス文学を深く最初に極めた一人でもあります。帝大で教えていた時期もありますが、後に作家專業になって、新聞社に勤め、そこから給料をもらいながら小説を書くようになる。英文学教授の道はそこで断ち切ったわけですが。漱石は当時の日本で恐らく最もよく英語のできる一人でありました。漱石は1911年にこういことを言っています。スライドに出しているのは少しの引用ですが、大変面白い説明なので、もう少し長く読んでみたいと思います。1911年に書かれた「語学養成法」という文章ですが、漱石はこういうふうに言っています。

「私の思ふ所に由ると、英語の力の衰へた一原因は、日本の教育が正当な順序で発達した結果で、一方から云うと当然のことである。なぜかというに我々の学問をした時代は全ての普通学はみな英語でやらせられ、地理、歴史、数学、動植物その他いかなる学科も皆外国語の教科書で学んだが、我々より少し以前の人になると答案まで英語で書いたものが多い」。

お雇い外国人というのが明治の時代、日本に来て、そういった人たちが大学で教え、外国語で講義をした。学生も試験で外国語を使い解答する、そういう時代だったわけですね。

「日本という独立した国家の点から考えると、かかる教育は一種の屈辱で、ちょうど英国の属国インドといったような感じが起こる。日本のナショナリティーは誰が見ても大切である。英語の知識くらいと交換のできるはずのものではない。従って国家生存の基礎が堅固になるにつれて、以上のような教育は自然に勢いを失うべきが至当で、また事実として漸々その地歩を奪われたのである。実際あらゆる学問を英語の教科書でやるのは、日本では学問をした人がないからやむをえないということに帰着する。学問は普遍的なもの

だから、日本に学者さえあれば、必ずしも外国製の書物を用いなくても、日本人の頭と日本の言語で教えられぬというはずはない」。こういうふうにあります。

つまり、日本では学問の基礎がないところ、すべて外国人に頼って授業をやってもらう。だから、漱石が普通学と言っていますが、地理であろうが物理であろうが自然科学の基礎であろうが社会学の基礎であろうが、どんな授業でも全部英語でやる、あるいは外国語でやる。そういった環境で教育を受けた日本人は当然英語がよくできるわけです。しかし、だんだん日本がしっかりしてくると、日本語で高等教育ができるようになるので、その分、英語ができなくなってしまう。そういった事態であっても、漱石はむしろこれは日本がちゃんとしてきた印なんだから、むしろ当然であると、いうようにも説明しているわけです。

最近では、この漱石が言ったことと逆のことが起こり始めていて、日本人は英語ができないから困る、もっと英語ができるようにならなければいけないと、大学教育でも英語をもっとどんどん使うようにしようという動き、圧力と言ってもいいんですが、それが強まってきています。ひょっとするとこれはある意味では、また明治時代初期に逆戻りというような事態になるのかもしれない。

漱石の言っていることは逆説的のようなのですが、非常に分かりやすい説明であろうかと思います。それで現代では「明治時代の日本人は偉大であった。あんなに英語がよくできた。今の日本は国際化社会の中なのに昔よりもできなくなっているんじゃないか。さてどうしたらいいんだろう。一生懸命もつと英語を使うようにしよう、英語ができるようにしよう」という話がこのところずっと続いているわけです。

英語は非常に重要であると、これはもう言うまでもないことですが、では日本語をないがしろにしているのかというと、そういうことではありません。英語は重要であって事実上の国際語である。英語ぐらいできて当たり前という風潮になってきて、「英語ぐらい」といっても実は一つの外国語を習得するのはそう簡単なものではないのですが、そういう時代ではあります。しかし、だからこそ、日本語を母語とする者は日本語を大事にしなければならない。私はそのように強く思っています。そもそも日本語で言うべきものを持たない人がいくらうまい英語でペラペラ何かを言っても、これは外国では尊敬されません。英語がうまいからといって尊敬されるということはないんですね。アメリカなどはどんな移民だって英語をしゃべりますから。英語がしゃべれるかどうかということではない。やはり、第一には皆が傾聴すべき中身のあることを言えるかどうか、ということです。

それから、外国に留学する学生は、もちろん外国のことを勉強に行く人たちのなので、日本のことにあまり興味を持っていない人が多いんですね。しかしそういう留学生が外国で聞かれるのは、決まって日本のことです。英文学を研究するためにイギリスに留学した日本人が、です。向こうの人にシェークスピアについて質問されるなんてことは絶対にありえません。その代わりに、何を聞かれるかという「源氏物語はどういう話なんだ」とか「お花、茶道はどういうふうにするんだ」とか、そういうことを聞かれるわけです。あるいは「日本の憲法は平和憲法というが、どういふものなんだ」とか「日本の軍隊は一体どういふ位置付けなんだ」とか、そういうことも聞かれると思います。

しかし、シェークスピアを勉強したいと思って、イギリスに留学する日本人の若者はそういったことを全く何も知らないことが多い。だから何も答えられないという非常に恥ずかしい思いをします。ですから逆説的なことなのですが、外国に留学しようとする大学院生には、私はいつも日本語のことをちゃんと勉強して行けよ、日本に関する基本的な本を必ず持って行けよ、というふうに言っております。

ともかく頑張るって日本のことを外国人に伝えられるように英語を磨いていく、ということは大事なのですが、「英語ぐらいできなきゃ、いまだき話にならない」という、この「英語ぐらい」というのがくせ者でありまして。言語学的に見ると、英語というのは実は決して優しい方の言語ではないんですね。特に発音に関してはロシア語より相当難しいです。ともかく何でもいから英語を話せ、とか、英語が不得意な国文学の先生にともかく英語で授業をやってみろ、とか、そういう理不尽な圧力が最近かかっているわけですが、そうすると、日本の偉い方でも、見栄を張って無理をして英語を使って、しかし実はかなり間違った恥ずかしい英語であるという場合があります。

また、日本人によくありがちなのは、文法的な過ちを恐れて何もしゃべれなくなること。本当はもっと英語を知っているのに、それよりずっと下手に見えてしまう。これは確かによくないことで、別に文法的な間違いなど、コミュニケーションの必要がある場合には恐れることはありません。外国の非常に公式の、例えば重要な講演会のような場で、無理に下手な英語でしゃべって、その英語がかなりメチャクチャであつたら、これは「英語がそこまでできて上手ですね」って褒められるよりは、やはり恥をかくという感じがするはずなのですが、それがあまり分かっていない方が多いように思います。

次のスライドですが、この変なタイトル「自分的には金曜日の方がましです」。これはちょっと説明しないと分からないのですが、私のところには日本語のことを研究したい外国からの非常に優秀な留学生がよく来ます。今も何

人も私が指導しておりますが、そういった人たちは大抵、文科省の国費留学生として来るような、それぞれの国のエリート、非常に優秀な大学院生たちです。

私のところに来ていたモスクワ大の大学院生でロシアの超エリートなのですが、村上春樹を研究していたロシア人がいます。日本語がだいぶうまくなってきました、ある日、私が研究のことで面談をしようと木曜日がいいか金曜日がいいか、とメールを送ったところ、その彼から日本語のメールが返ってきました。そのメールがこれなんですね。「自分的には金曜日の方がましです」。日本語として意味が分かるし、たぶん若者がこういう言葉遣いをしているのかもしれませんが、やっぱりこういう日本語、日本語を勉強している外国人だからといって、こういう日本語を公の場でもし堂々と使うのであれば、非常に恥ずかしいことだと思います。本人がもう、自分は日本語が結構できると自信を持ってしまっているんですね。呼び出したときに「この文章は少なくとも2つ、絶対に直してもらいたいところがある。どこだか分かるか」と聞いたら、本人は分からない、と。自分の友達はこんなふうに言っていますよ、と言うんですね。

我々が、自分は英語ができると思って英語を使っている、これぐらいのレベルの恥ずかしい変な英語を、もう日常茶飯事的に使っているのではないかと思います。ビジネスで必要に迫られて「これ1個100円売る、いい?」とかですね。そういう英語でも、通じればよいという世界だったらそれはいいのですが、これはやっぱり教養ある人間の使う言葉ではない。

「人の振り見て我が身を直せ」ということわざがある通り、自分が使っている英語も、ひょっとしたらこれと同じようなものであるかもしれない、そういう想像力を持つ必要があると思います。「だから英語を使うのをやめなさい」と、私は言うつもりは全くないのですが。100人が100人、日本人が全部バイリンガルになるとか、全部通訳ができるぐらい英語ができるようになるなんて、そんな絵空事は実現するわけないので。本当のプロといえる、非常によくできる人は、100人のうち5人とか10人とか育てる必要はあると思いますが。全員が全員、英語がしゃべれるとか、日本の公用語を英語にしまえとか、そういうことは非現実的であると思います。

ということで、英語というのは非常に大事なんです、大事であると同時に、外国語というものはそう簡単に教養のあるレベルで身につくものではない、ということも心しないといけないわけです。

それから、もう一つ英語に関してぜひ声を大にして言っておきたいのは、英語だけではやっぱり世界は分からない、ということです。英語は大事であ

る、英語を知らないと世界を理解することができない、たぶんこれは正しいとは思いますが、もう一つこのことを補わなければいけません。世界には英語の通じないところも、そういう人々もたくさんいます。それは未開の何か原始人のような人が住んでいるところだけではありません。ヨーロッパの中でも、ラテンアメリカでもそうですが、かなりの知識人、教養のある人たちが英語をあまり得意としない。あるいは、あまり英語を使いたがらない、そういう地域はいくらでもあります。共通に理解しあうための共通語としての英語。そのレベルで話し合っていたら、「これ1個100円で、300個買おうよ」とか、そういうビジネスの話だったら十分できるでしょうが、やはり各民族の心というものがあります。そういうレベルの英語でいくら会話したところで、そういったものは極められるはずもありません。ですから、今の世界で本当に必要な教養というのは、言語に関して言うと、英語ができるというのは、これはもう前提として一生懸命やるべきなんです、それだけではだめ。つまり、複数言語の知識を基礎にした教養こそが、真の教養であろうと思います。ここで私は「国際教養」という言葉を使ったんですが、亀山先生のご意向ではこれを「世界教養」と呼んでほしいということです。

それで、国際教養をうたっている人々、大学は、日本でも既にたくさんあります。国際教養学部と名のついたところもあります。秋田には国際教養大学という、そのものズバリの名前を冠した大学もあります。ここは、最近亡くなられてしまいましたが、中嶋嶺雄学長が非常に豪腕ともいえる力とビジョンによって創り上げ、数年の間に非常に評判の高くなった大学です。しかし、亀山学長が目指しているのは、そういった既に世に既出している国際教養とは一味も二味も違う、新しい教養のあり方なんだろうと思います。今日、亀山先生に呼ばれてきたのでごまをするわけではないのですが、私も実は全くその通りだと。何と呼ぶかというのは、それぞれの人のネーミングの方針というのがあると思いますが、主旨としては私も全く亀山学長に賛成です。

またちょっと古い教養主義の話に戻ってしまいそうなんですが、教養とは何か、あるいは教養教育とは何かについては、もう世界中でいろんな人が昔から言っています。しかし、昔のものだといって、古ぼけたとうち捨てるのではなく、やっぱりそこには傾聴すべき良い言葉がいろいろあります。例えばイギリス19世紀の哲学者であり、経済学者として大変有名な、世界の思想史、経済学史などに必ず名前が出てくるジョン・スチュアート・ミルという人がいます。この人は、セント・アンドルーズ大学の名誉学長に就任したときに、大変すばらしい「大学教育について」という記念講演をしています。1867年のことです。

ミルは、大学というのは本来、職業教育の場ではない、専門的知識をよりよく使うためにも一般教育が必要であるということを非常に強く訴えています。当時、既にイギリスでは自然科学が勃興しておりますから、こういうミルの見解を古くさいと言って、例えばスペンサーのような科学者は批判したのですが、ミルは頑として教養教育が重要であることを譲らなかった。それでミルは、教養人、教養ある知識人というのはどういうものかということについて、それは「全てについて何事かを知っていると同時に、何事かについて全てを知っている人」だと、こういうことを言っています。今、聞いただけですぐには分からないかもしれませんが、要するに、いろいろな分野の学問、世界の知の領域がありますが、数学でも、天文学でも、物理でも、倫理学でも、文学でも、音楽でも、全てについて何事かは知っている。多少、少しは知っている。そういう幅広い知恵を持っていながら、しかしある種のことについては、その全てを知っている。つまり、専門を一つ確たるものを持っていて、それについては誰よりも深く知っている。しかし、それ以外のことを全く知らないというのでは困る。どんな分野のことでも何かは知っている。そういう人が大事なんだということなんです。それが、真の教養ある知識人だと、ミルは言っているわけです。

そこで、この「大学教育について」という講演の中でミルが言っていることをちょっと読んでみます。

「人間が獲得しうる最高の知性は、単に一つの事柄のみを知るということではなくて、一つの事柄あるいは数種の事柄についての詳細な知識を、多種の事柄についての一般的知識と結合させるところまで至ります。広範囲にわたる、さまざまな主題についてその程度まで知ることと、何か一つの主題を、そのことを主として研究している人々に要求される完全さをもって知ることとは、決して両立し得ないことではありません。この両立によってこそ、啓発された人々、教養ある知識人が生まれるのであります」。

確かにこういう文章を読むと、現代的な分かりやすい翻訳が欲しいなと思うところですが、要するにミルが言っているのは、教養ある知識人というのは、さまざまな幅広い分野について多少のことは必ず知っている。しかし、ある専門家としては、その分野については、誰よりも深く知っている。そういうたさまざまな分野を、自分の知識によって結び合わせることができるという人だというわけです。19世紀半ばに、ミルというこの人自身が「大知識人」であったわけですが、こういうことを言っていました。

これをもう少し分かりやすい言葉、あるいは私なりの言い方をしますと、現代の大学というのは、専門的な知と実践的な知が交差すべきところであると

言いたいと思います。専門的知識というのは、ある種の体系性を求めるので、積み上げ、深いところから木のようにそびえ立っていく。そういった垂直的な知のあり方です。それに対して実践的な知というのは、幅広くいろいろな分野にまたがって、数学のことも、音楽のことも、宗教のことも、文学のことも、それぞれそれなりに興味を持って、水平的に移っていくことができる。しかも、単に気ままに移り飛び歩くだけではなくて、知っていること、理解したことをうまく結び合わせていくことができる。それが私の言う実践的知なので、それは水平的知と言ってもよいです。水平、それから、垂直。2つの知のあり方があり、その知が交わる場所、これが大学であるべきだと思います。まさに教養教育というのは、この交差があるということが前提となって、初めて意味があるわけですね。教養教育というのは、この垂直と水平のどちらかといえば、水平にかかわるものですが。水平しかなくて、垂直な軸が存在しないところでは、それは単なる軽薄なつまみ食い、飛び歩きに過ぎません。どこかでしっかりとした柱、垂直な柱がある、支えになるものがあるということが前提で、その水平的な知を展開していく。それができる場が大学であるというように私は思います。

もう一つ、現代の教養教育のあり方にとって、根本的・革新的に大事なことのひとつは、他者への想像力を養うということです。これは亀山学長が「エンパシー」という言葉を口にされていました。エンパシーという言葉もご存じの方が多くと思いますが、これも大変良い言葉です。共感する能力ですね。それを私なりに言い換えると、他者への想像力であるということになるんです。つまり世界教養というのは、なぜ世界がわざわざ付くのかということ、自分で完結しない、常に世界の中にいる自分が他者と向き合うということ前提の教養ですから。これはまさに他者への想像力を養うということに尽きると思います。例えば、国歌とか、君が代とか、いろいろなことが政治的に問題になります。私は、私なりに愛国者ですから、国歌に対して敬意を表するということ、これはとても大事なことだと思います。法律でどこまで強制すべき問題かは少々私は疑問ですが。しかし、例えば日本人が日の丸に敬意を持って、それにお辞儀をする、それを尊敬するというときに、この世界には同様に自分の国の国旗を尊敬して愛している人たちがいるという、そのことが想像できないとダメではないかと思えます。

この先が私と亀山学長両方の専門分野に、やや我田引水的に引きつける話になりますが、実は、他者への想像力を養うための究極の精密な装置というのは、私はやっぱり文学ではないかと思えます。文学なんてものは、いまだき役に立たない無用の長物であって、こんなもの大学で教える必要は

ないというように極論する人までがいるのですが。大学で文学をきちんと教えるなかったら、一体どこが教えるのだろう、大学しかないでしょうと私は思います。日本の中等教育を見ていると、国語という科目はあるのですが、文学をまともにも教えていません。国語の枠の中で、日本の作家でしたら漱石とか芥川とか、もう少し新しいものも断片的に読まされてはいますが、それは文学を読むという感じではない。

例えば『カラマーゾフの兄弟』という作品があります。ドストエフスキーの最大の長編で、これは亀山先生のすばらしい新訳によって、時ならぬベストセラー、100万部超えという大変なことが起きたわけです。私は漱石の小説を読むのも大事だけれど、日本の若者がドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を読み通すということも同様に、あるいは、それ以上に大事かもしれないと思います。ところが高校までの国語の教育の中では、『カラマーゾフの兄弟』なんてどこにも出てこない。そもそも教科の名前が文学ではなくて国語ですから、外国文学というものはあまり入ってこないんですね。しかし、良い文学は日本もロシアもアメリカも関係ないわけです。良い文学を若い人は読まなければいけない。しかし、それを読む枠というのは、高校までにはほとんどありません。やはり大学教育でこういうものも含めてきちんとカバーしていく。これが教養だろうと思います。その際に、日本人は日本文学だけ読んでいればよいというのであれば、これはやはり非常に偏った教養であると思います。本当の意味での世界教養というのは、日本であろうと、ロシアであろうと、インドであろうと、どこであろうと、朝鮮であろうと、中国であろうと、いい文学はどれでも読むということです。これが世界教養的な文学のあり方で、それが実現できるのは教養教育を掲げた大学でしかないであろうと思います。しかし、文学は無用で役に立たないものだとよく言われてしまう。

こういうふうと考えてみますと、本当は有用の、本当は役に立つものかもしれないと、私はあえて言ってみたいという気がします。このスライドに掲げましたが、少々貴重な意見が書いてあります。1987年にノーベル文学賞を受賞したヨシフ・ブロツキーという、ロシア出身でアメリカに亡命した、非常に越境的な知の実践者ですが、この人のノーベル賞講演からの言葉です。

こういうことを言っている文学者がいるのを聞くと、皆さん実業肌の人は、何て非現実なことを言うヤツだと思いかもかもしれませんが、ちょっと聞いてみてください。

「芸術全般、特に文学が社会において少数派の財産でしかないという状況は、不健全で危険なことに思われます。私は国家の代わりに図書館にさせるなどとは、実際には何度もそんな考えが心をよぎったものですが、

申しません。しかし、もし我々が支配者を選ぶときに、候補者の政治綱領ではなく、読書体験を選択の基準にしたならば、この地上の不幸はもっと少なくなることでしょ。私はそう信じて疑いません。我々の支配者となるかもしれない人間に、まず尋ねるべきは、外交でどのような路線を取ろうと考えるかということではなく、スタンダールやディケンズ、ドストエフスキーにどんな態度をとるかということである。そう私は思います」。

ということで、私も本当にそうかなと半ば思うのですが、私のような人間でも、もしもプーチン大統領に会う機会があったら、あなたはドストエフスキーをちゃんと読んでいますかと聞いてみたい。安倍首相に会ったら、あなたはトルストイを読んでいますかと、一度聞いてみたいという気がします。

今までの話の中からも明らかのように、例えば文学を読む。これ、文学でなくてもいいんですね。音楽でも演劇でも、芸術のジャンル、それから学問でもいいんです。実は、一つの国の中に、日本の国の中だけに限定されて行われる学問とか芸術というのは本来ありえないと思います。ですから教養というのは元来、国際的なもの、世界的なものと言ってもいいのですが、国の枠を越えていくものだけということですね。

先ほどの夏目漱石ですが、あの明治時代にあつて、既に学問というのは普遍的なものだと喝破していますね。この時代の日本人としては、すごいことだと思います。つまり、学問も芸術も本当に優れたものというのは、本来、国を越えるものだけということです。学問が、日本の中だけで真実であるとか、日本の中では通用するがアメリカでは通用しないなんてことがあったら、これは学問とは言えません。芸術も同じことであります。ですから国際的という言葉をついていろいろな場合に頭に冠するわけですが、例えば、彼は国際的な学者である、とかですね。本来、本物の学者、本物の芸術家だったら国際的ななんて言葉は要らないわけです。つまり、既に芸術・学問というのは、このグローバル時代において、その存在そのものが世界的でなければいけない、ということです。これは非常に逆説的に聞こえるかもしれませんが、日本語しかできない、日本文学しかやっていない国文学の狭い専門家ですら、その業績がすばらしければ、日本文学の分析がすばらしければ、それは即世界的になってしまうんです。今では外国の日本学者で、日本語が非常によく読める人がたくさんいます。ですから日本人の国文学研究者が、仮に日本語で書いたとしても、すばらしい学問的に書いたのなら、外国の学者たちが一生懸命読むはずですよ。そういう意味では日本の国文学者でさえも、この時代にあつては真の学問をやっていれば国際的、世界的になっていくわけです。

て簡単には説明できないので、そんなこと言われてもにわかには納得できないと思われる方がいるかもしれませんが、ここでいう翻訳というのは、かなり広い意味での文化的な異民族間の交流のための行為と考えていただければ、納得していただけるのではないかと思います。

あれこれ取り留めのないことを言いましたが、私自身、国際交流を実践している立場で…なんていうと聞こえがいいんですが、昨日までロシアに行っており、一睡もせず今日の準備をいたしましたので、論旨の流れが少し取り留めもなくなってしまったかもしれません。

昨日までロシアに行っていたのは、日本の作家の加賀乙彦さんという、もうかなり高齢の方ですが、日本を代表する作家の一人です。その方の『宣告』というこれまた非常に重い、日本版の『死の家の記録』とでもいえるような長編ですが、このロシア語訳が刊行されまして、その出版記念の講演会などをロシアでやるということで、そのお手伝いをするために一緒にモスクワに行っておりました。こういった翻訳をする、それを向こうの人に読んでもらう、これもまた非常に重要な文化交流のあり方だと思います。

ということで、少々取り留めもない話でしたが、最後に箇条書的に、6つほど今日のお話の内容についてまとめてみましたので、ぜひ記憶にとどめて考えていただきたいと思います。

第一に現代の教養、21世紀の世界教養のために必要なこと、あるいは考えるべきこととして「英語は重要である」ということ。これは前提、デフォルトですね。だからこそ日本語を大事にしなければならない、ということです。

2番目、「英語ができなければ世界はわからない」、もうこれはこういう世界になってしまっているの仕方ない。好むと好まざるとにかかわらず、ロシア文学者であろうと、国文学者であろうと、エンジニアであろうと、ビジネスマンであろうと、英語ができないと世界を相手に何もできない。しかし、その先がより大事かもしれない。英語だけでも世界はわからない、世界の言語的多様性へのまなざしが必要である、ということです。私は亀山先生が率いる名古屋外国語大学に期待したいのは、英語教育の益々の重点化、拡充とともに、この多言語的な教養のあり方、これをぜひ追求していただきたいということです。

それから3番目。「知の交差点としての大学」。先ほど言いましたが、垂直的・専門的知と水平的・実践的知、それが交差するところが大学であると。どっちか一つだけではダメなんです。世界教養というのはその交差の場で初めて意味を持つということです。

4番目。「他者への想像力を持つこと」。これこそが実は真の愛国心であると思いますし、本物の教養、世界教養であるというように思います。

5番目。「教養とは、すべての本物の学問がそうであるように、元来、国際的・越境的なもの。国際的でない教養は偽物である」。つまり、日本だけでは通用するけれども、外国では通用しません、なんていう教養は、それは教養とは言えないだろうということです。ですから、それを亀山先生はあえて世界教養と呼ぼうとして、これから新しい冒険と改革の道に乗り出されようとしていると思います。そのことが大事であって、究極的には国際的とか、そういった形容は本来要らないのではないかと思います。

最後6番目。これは今まで言わなかったことを含めて、最後のまとめとします。「世界教養というものは、固定した知識の体系ではない」。つまり何らかの一定のセットされたメニューがあつて、これとこれを覚えれば、知識として蓄えれば、あなたは世界教養人ですよとか、そういうものではない。むしろ、これはもっと動的なもの、ダイナミックなものとして捉えるべきだと私は考えております。つまり「世界の中で他者と向き合いながら、自己形成を求める知の自由な運動」、この運動そのもの、これが世界教養であるべきだろうと思います。ここで例えば、教養という言葉を使うと、日本人の昔の教養人がすぐ思い出すのが、例えば教養小説という言葉があります。ドイツのゲーテが『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』といった小説を書きまして、これが典型的なビルドゥングスromanといわれたわけです。ドイツ語でビルドゥングスromanを、日本では教養小説と訳したわけです。このビルドゥングという言葉、形成と訳しても間違いではないんですが、自己形成ということなんです。つまり、最初から既に決まったセットメニューの教養でなく、自己形成しながら自分を見つけていく、自分が自分になっていく、それが教養であるということなんです。まさにそれが「自己形成を求める知の自由な運動」であると、私が言いたいところであります。

ということで、少し時間を超過してしまいましたが、これが今私に言えることの全てと言っていいかと思います。長時間ご静聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

東京大学大学院人文社会系研究科教授 沼野 充義
中日新聞社代表取締役社長 小出 宣昭
京都三大学教養教育研究・推進機構 林 哲介
司会: 名古屋外国語大学長 亀山 郁夫



● (司会) 中山

それでは、名古屋外国語大学創立 25 周年記念シンポジウム、後半プログラムのパネルディスカッションの開催をいたします。パネルディスカッションの進行は名古屋外国語大学、亀山学長にお願いいたします。

● 亀山

では、これからパネルディスカッションの部に入りたいと思います。先ほど東京大学の沼野充義先生から基調講演で「21 世紀のグローバル世界は教養とともに成熟する」というタイトルのお話をいただきました。このお話の中で最後に 6 つのポイント、ご指摘としておまとめいただいたので、もう一度これを反復してみたいと思います。

今日、沼野先生を基調講演者として、お 2 人のパネラーにお越しいただいております。ご紹介いたします、中日新聞社代表取締役社長の小出宣昭さんです。京都三大学教養教育研究・推進機構の林哲介さんです。そして、今講演していただいた沼野先生です。

21 世紀の世界教養をどうやって実現するのか、そのための基本的な認識の共有、これを 6 つの言葉で沼野さんに表現していただきました。



「①日本語を大事にしなければならない」、英語は大事である。だからこそ、日本語を大事にすべきということなんですね。この言葉の奥にどのような意味が込められているのか、今日ここに来ている皆さんがそれぞれご自分なりに反芻されたのではないかと、思います。私も翻訳者として、日本語のニュアンスの隅々まで表現しようとして徹頭徹尾頑張ります。世界の多様性を翻訳する。それを日本語の多様性の中にどう生かしていくかという点においてです。自分と、他の文化的背景を持った人との間の交流という側面における翻訳行為において、その原点となるものが文学であるということなんですね。大事にするということは、日本語の持っている表現の可能性をギリギリまで追求することなのだと思います。

「②英語だけでは世界は分からない」。英語ができなければ世界は分からないということが、ある意味一つの定義のようなもので、ここに集まっている皆さん一人一人がそのような認識を持たれていると思いますが、英語だけでも世界は理解できないということなんですね。沼野さんご自身も数か国語を本当に豊かな表現でお話しされます。世界の言語的多様性のまなざしという言葉を使いますが、英語以外の地域の言語を学んだものにしか分からない、最も秘めやかな聖なる部分であり、英語一元化の時代においては、同化・抹殺されるといった状況にあります。これはやはり問題ではあるということですね。しかし、前提は英語、この認識はもちろん変わらないということです。

「③知の交差点としての大学」。これはジョン・スチュアート・ミルの言葉から普遍化された沼野さんなりの新しい概念提示であると思います。垂直的知は、ある一点についてはすべてを知っている、専門的な知のシステムをしっかりと押さえている人間。水平的知は実践知と呼んでいます、豊かな常識人としての姿。何度もよく知っているという状況です。それを専門性の中に有機的に結び合わせることができる力、それが真の意味での知性ある教養人であるということなんですね。大学の役割として、これが求められているというお話でした。

「④他者への想像力」。私自身も名古屋外国語大学の学長として、学生に伝えたい最も重要な概念の一つに「エンパシー」という言葉があります。

共感力、感情移入力とでも言いましょうか。4月の入学式でも学生に対して「心優しいグローバル教養人になってほしい」とお話ししました。「心優しい」というのは「他者への想像力」をしっかりと持った上で自分を主張していく、そういう人としてのあり方。そういう根本的なところを持って、かつグローバルなところで活躍できる人材。そのような意味があるんです。他者への想像力を持つことこそが真の愛国心であり、今、日中韓の間で深刻な政治的対立が起きている中、まさにこの共感力を共有できるということに最終的な解決の道があるのではと思うんです。ヨシフ・ブロツキーという詩人がノーベル賞を受賞した講演を引用し、沼野さんもそれぞれの地域、あるいはそれぞれの国のリーダーとなる者にどんな読書経験を持っているのか、その人の成熟ぶりを聞くのではなくて、むしろより根本的なところで問いかけてみたいということでした。プーチン大統領に「あなたはトルストイを読んでいますか」という。これは、ある意味では「他者への想像力」をしっかりと持ったリーダーが求められている、そういうメッセージにもつながっていくと思います。

「⑤教養とは国境を越えていくものである」。「国際的」「越境的」等、こういった言葉を排除していく方向にあるのが、本来の教養という知識のあり方そのものということですね。私たちの大学にも、現代国際学部国際教養学科があり、受験生にも一番人気で優れた学生が集まりますが、これからは世界教養という視点から学生の関心を引き付けていきたいという思いがあります。

「⑥世界教養は固定した知識の体系でなく～自由な知の運動である」。これはある意味、文学的な発言でした。世界教養というのは固定した知識の体系ではなくて、世界の中で他者と向き合いながら自己形成を求めていく、知の自由な運動であるという提言。そこで引用されたのがゲーテでした。いわゆるビルドゥングという言葉。自己形成という言葉の中には、最終的にどのような形で世を渡っていくのか、形の上では見えないのですが、目的に自己形成というものはあるべきなんだということですね。そういう原点に立ち返る、そんなメッセージだったと思うわけです。

以上、沼野さん自身が行ったまあとめに従って、先ほどの報告を私なりに咀嚼し説明させていただきました。いよいよこれからシンポジウム、自由討論と言いましょか、議論に入っていきたいと思うのですが。それではまず小出さんから、沼野さんの基調講演に対する意見や感想を自由にお示しいただければと思います。

●小出

中日新聞の小出でございます。よろしくお願いたします。先生の話をずっ

と聴いておりました、ここは僕と一緒にだな、ここはちょっと違うかなと思いがら拝聴してまいりました。6つの指摘の中の、日本語の大切さ、これは私も100%同感です。人間がものを考えるとき、言葉で考えます。ボキャブラリーの少ない人は、その範囲内でしか考えることができないんです。よほど天才でない限り、ほとんどの人は母国語で考えます。日本語半分、英語半分の人は、それぞれ半分のボキャブラリーで考えるから、思考の深さが全然違うと思うんです。

私も取材の経験でアメリカやイギリスに行きましたが、誰でもまったく頭脳とは関係なく英語を話す。普通の英語は条件反射の世界です。やはり何を言うかが大事で、きれいな発音で中身の無いことを言っても評価されません。シェークスピアの話になったら、カタカナ発音でも、ハムレットのことをちゃんとと言えるか、これが英語力だと思います。その根っこが国語、日本語なんです。だから日本語がまず一番大事であって、ものを考える最大の手段は、われわれ日本人にとっては日本語なんです。

私は東海地方のある大学で委員を務めています。医学部の入学試験で国語がないんですね。どうしてと聞いたら、私学の医学部はほとんど国語がないので、国語を入れるといい学生が取れなくなるとのこと。おかしいことだと思います。医者は患者である日本人を診るわけですから、その患者の心がどういう状態か、診断結果をどういう表現で患者に伝えるか、当たり前前の国語能力が当然必要だと思うんです。国語を勉強しない薄っぺらなお医者さんがまた生まれてくる。そういう時代なんですね。

それから、文学・教養が「無用の長物」という風潮があるとのこと。岡倉天心の『茶の本』の中で、花について語っているところがあります。「無用の用」という表現で言っているんです。花というのは人間の食糧にもモノづくりの材料にもならない。にもかかわらず人間は花を飾って踊りを踊り、花を飾って結婚式を挙げ、花がなければ死ぬこともできないと、きれいな英文で書いてあります。無用の用とは、花のような存在である。まったく実用にはならないけれども、人間である以上、それが無ければ生きていけない。私は今日、教養というのは花のような存在かもしれないと思いました。

一番最後の「知の自由な活動である」については、先ほど控え室で話したら、ぜひパネルディスカッションで話してくれと言われたことがありますので、私なりの知の自由な活動の一端を紹介したいと思います。夏目漱石の話なんですが、『坊ちゃん』の舞台は、私の知の自由な分析からすると、松山でなく、ロンドンではないかと思うんですね。国費留学生の漱石はイギリスに派遣されながらも、ノイローゼになってイギリスが嫌いになって帰ってきます。超一流の英語力を身につけて、『坊ちゃん』を読んでいくと、憎たらしい登

場人物に「赤シャツ」という名のものがあります。明治時代に日本で赤いシャツを着ている人は、たぶんいないと思うんですね。ところがイギリスのナショナルカラーは赤。ユニオンジャック、郵便ポスト、二階建てバスも赤。バッキンガム宮殿の衛兵交替の近衛騎士団は全部赤。イギリス陸軍の代名詞はレッドコートといいました。赤いコートを着て。ナショナルカラーが赤なんです。ですから「赤シャツ」は憎たらしいイギリス人の代名詞なんだと思ったのです。それから親友が「山嵐」という数学教師。これは本当にいい人です。ヤマアラシは日本にはほとんどいない。私はロンドンに3年半いましたが、夏の夕暮れになると自宅に必ずヤマアラシが来ました。ハリネズミです。日常的な動物なんですね。それからもう一人「うらなり」。人がいいがバカにされている人物です。変な名前ですが、ロンドンへ行くとアイルランド人で一番多い名前は「フラナリー」なんです。たぶん登場人物の名前は、全部英国製であると私は思うんです。イギリスが大嫌い。そして赴任先は松山といわれていますが、松山のことは全然書いていないですね、彼は。これが知の自由な運動による「坊ちゃん論」です。

● 亀山

ありがとうございました。小出さんによれば、日本人は根本的なところでは日本語で思考している。語彙で思考している以上、どう有機的に組み立てられていくかで、その人の思考の深まりも規定されてくるということですね。

長年、記者として活躍されてきましたが、一字変わるだけでニュアンス、メッセージ性が変わります。美しい日本語が大事である、というところを越えて、日本語の持っている根源的なリアリティというか、あるいは日本語の持っている文法的な問題。そういった細かい部分にまで根ざした思考が要求されているのだと思います。

それから、文学や教養は花のようなものでは、ということでしたが、いい比喻だと思いました。『坊ちゃん』の話をお願いしたのは、教養とはまさにこれだ、ということ、サンプルとして示したかったからなんですね。『坊ちゃん』の解釈を根本から変えてしまうような面白い話でした。私の要請でお話ししてくださいました。

続いて、林さん。林さんは教養教育について、優れた本を書いている方です。理系の方ですが、われわれは教養というと人文的発想から考えがちですね。大学における教養全般のありかた、さらに補足的にでも理系から見た教養というイメージ、あるいは理系の人から見る人文的な教養の問題点とか、そういったところにまでコメントいただければ、と思います。

●林

今日、沼野先生や小出先生の話で、随分文化的香りの極めて高いところに並んでいて、全く畑違いの私が、お話しするのもいささか居具合が悪いという感じはしているのですが。まずこのシンポジウムに誘われたときに「グローバル時代の教養」と聞きまして、私、グローバルという言葉が嫌いなんです。

新しい時代の教養教育ってどうすればいいんだろう、と検討していた期間が長かったのですが、1995（平成7）年から途端に変わってくる。オウム真理教の地下鉄サリン事件があったのと、Windows95 が世の中に現れた、ここが一つの曲がり角になっていると痛感したわけです。

96年、経団連が「創造的な人材育成について」というものを出してきました。98年には、関経連は「21世紀に向けた人材育成」、同年、大学審議会が「21世紀の大学像と今後の改革について」を出してきました。その2年後、経団連が「グローバル時代の人材育成について」というものを出し、同年、大学審議会が「グローバル時代に求められる高等教育のあり方について」というものを出してきました。

この全体の流れの中に一貫しているのがグローバル化という言葉。教養教育をどのようにしていこうかということ、花園のように議論してきた私のような人間にとっては、突然土足で踏み込まれたような気がしたんですね。だから好きではないんです。

もともとグローバル化という言葉が出てきたのは、金融資本の国際化に伴って、どうやって日本経済の大変なところを立て直すのか。そのためにどういう人材が欲しいのか。ということから、すべてが出発している。それが、大学の教養教育に対して何かを求める。それが本当に教養教育なのか、という強い疑問を持って、われわれはこれまで来ているという経緯があるんですね。

でも今日は、本当の国際化、世界教養についてお話しいただいたことは、こういうものとは本質的に違う。本来の教養を話していて、非常にほっとしているんです。

私も海外で1年半ほど過ごしていたことがあるのですが、そもそも日本語で言うべきものを持たない人が、いくら英語でペラペラ言っても国際的に尊敬されない。まったくそのことを実感したことがありました。海外の人たちと交流が進むと、自分の教養がいかに浅薄であるか、つきつけられるんです。

歴史・文化・宗教・芸術・科学、そういったものについて、どれだけ幅広く興味と関心を持っているか。いつでもそういうものについて好奇心があり、知りたい、聞きたい、考え、本当は何か、と疑問を発したい。そういう資質

が自分は弱いと痛感させられたことがありました。これは知識の量ということではないと思います。「自己形成を求める知の自由な運動」、まさにこのことだと思うんです。お話を聴いていて痛感しました。

今日と明日、同志社大学で大学教育学会というのが開かれておりまして、明日は私も行くんですが、その中で例えば教養教育の質保証のあり方とか議論されているのですけれど、今日のこのシンポジウムもそこへネットをつないだ方が良かったんじゃないかと思うくらいの印象を持ちます。

私自身、大学の先生・学生と毎日向かい合っている者として、これから大学の教養をどうすべきかというときに、いささか危惧していること、課題に感じていることを触れていきたいと思います。

このような話が今の学生たちにスッと入るの心配ですが、昨年、内閣府が科学技術と社会に関する世論調査を行ったんです。その中で「科学技術についてのニュースや話題に関心がありますか?」という質問に、年齢層が高いほうがまだマシな結果が出ています。若くなるにつれ、どんどん落ちていく傾向があるんです。「最近の問題について、どの程度知っていますか?」については、日本人の一般の人たちと、アメリカとイギリスを比較しているデータです。環境汚染問題、地球温暖化、新しい科学的発見、エネルギー問題、どれを見ても、日本は低い。これが昨年のデータです。もっと古いデータで、1996年のデータでは、OECDによる先進14カ国の調査があります。一般市民対象の科学的知識調査というもので、「科学の深い知識、ある程度の知識」は13位、「科学技術に注目している市民」14位、「科学技術に関心のある市民」14位と、先進国14カ国の中で日本が最下位なんです。2001年の文科省の科学技術政策研究所の調査でも、15カ国の地域国際比較、科学的発見に対する関心度というものが載っています。日本が一番下に載っていて最下位です。このようにOECDに加盟する各国の中では、一般市民の科学技術に関する関心が最も低い状態になっているということです。実は科学技術だけでなく、一般的な社会問題も、国際・外交・防衛・安全保障問題、教育・経済等、アメリカ・イギリスと比べると、日本は完全に落ちていて関心度は極めて低いというデータがあるということです。

このことをどういうふうを受け止めるかですが、私は日本の教養教育の課題があると感じるんです。こういったことを意識して、大学の教室を見てみると、教養教育の学生がどういう反応を見せるかということ、かなりの学生が、教室で学んでいることが自分にとって、何の意味があるのか分からないまま教室にいるという状況があります。あるいは難しい知識・学説は、自分の外側にそよそく存在しているという感覚。彼らにとって必要なものとは、目先

の進路に役立つものだけという感じです。教室の後ろの方では、このごろは私語はないが、みんなスマホをいじっているのがあちこちで見られる。というものに我々が直面している状況なんです。

目先の役立つもの、つまり目先の進路とか、そういうものに役立つものだけが必要だとすれば、教養教育というのは不要になる。あるいは役立つ教養教育になってほしいというようになる。今のグローバル化という言葉から出てくるものも、英語でしゃべる力、英語のコミュニケーション力ということばかりが強調されている。結構な数の大学がそのことにだけ焦点を当てている。このことには非常に違和感を感じているんです。

結局、大学に入り、学ぶことのイメージ、それが貧弱になっていると思うんです。入学してくる学生の多くが、教養教育に対して、自発的なニーズを持っていない。このことはそんなに最近のことではないです。先ほど大綱化というのがありましたが、もっと以前からです。高度成長がずっと進んで、大学が大衆化してから、どんどんそういう状況が出てきました。学生たちが教養教育のことを「パンキョー」と呼んだころから。だから今から30年越える前からです。

その点、それ以前の教養教育は、エリートのためのものでした。マルクス・エンゲルスを小脇に抱え、まさにエリートの教育の世界。大学が大衆化してから、それを変える新しい教養教育のモデルを十分に出し得ない歴史が長いところに日本の問題がある。ところが教員は自分たちが大学の学生であった頃に受けてきた教養教育の印象で、自分の専門的な立場に立って話をされる。話をどう受け止めるかは学生一人一人の問題。大学の教員はずっとそういう認識で過ごしてきました。そのことが入ってくる学生との間に完全なギャップを生んでいる。いまなお十分な克服がなされていない。これが、私たちが今感じている教養教育の非常に当面している課題であるというふうに思っているわけですね。本当であってほしい教養教育の姿を、今の学生にどう伝えていけばいいのか。今私がいるところで先生たちと四苦八苦議論しているという状況にあります。

今の学生は理想を語れない、理想を語るなんてしんどく思えるんです。自分の夢をはっきり語ると、友達が引いてしまう。こういう雰囲気は教室の中にある。

感じていることは2つあります。1つは、日本に生きている我々に昔から基本的な問題があるのではないかと。国際化・世界化といった言葉の関係で言ったときに、なかなか乗り越えられていない問題、それは、日本人一人一人が社会や世界に対して、主体的意思を持ってかかわる意識の弱さですね。これは欧米と本質的に差を感じます。真理や正義に対し、個人として

主体的に向き合っていく、主張していくということの弱さ。われわれ日本人は社会に生きておらず、自分のまわりの世間でしか生きていない。

もう1つ。先行きが非常に不透明で、希望の喪失ということが今の若い人たちに起こる。そこから、理想を語るということがしらじらしくなっている。この点については、この10年位強く痛感していることです。

こういった課題にどういうふうに向き合っていくのか？ 教養教育のあり方が分からないときには、欠かすことのできないことかと思っているわけです。

● 亀山

ありがとうございました。とても大事な、いくつもの問題の定義がございました。特に、理想を語れないというのは、喜びをイメージできないというところにもあるはずです。教養を語る際、自己をモデルとするか、他者をモデルにするかというところで、ずいぶん話が変わってくるんですね。何かものを語ろうとすると、やはり他者の持っている教養というものに対してどうしても目を閉じがちになる。教養の問題について考える際に、常に出発点を自分自身に置くという立場から逃れられない。逆に、人文系の人間は、ある意味そのような立場からしか語れない。そういう弱みがあるのかもしれませんが。林さんの提言は客観的なデータに基づくものでした。

その発言を踏まえながら、沼野先生から何かございましたらご発言お願いいたします。

● 沼野

今発言された林先生のご意見の方から、少し思ったことを申し述べさせていただきます。社会や世界に意識的にかかわろうとする意志が弱く、日常生活にかかわる非常に狭い範囲での視野になっている問題。確かに今、私は文芸評論をやっていますが、日本の作家が書く小説はどうしても社会的な横の広がりが弱いんです。投稿される作品は自分のこと。自分の恋人のこと。せいぜいそれくらいのことしか書いてない。あとは仕事につけず困っているということは描くが、では社会構造はどうなのか、とか、そういう話にまでいかない。だから非常に視野が狭い。自分のまわりしか書かないタイプの小説が多い。そういうのは大体つまらないものが多い。水村美苗さんは、あのエッセイの中で、今の日本語の書かれている現状はよくないと言っています。遊園地で遊んでいるような小説ばかりだと。

日本では近世以来、戯作的なものが多く、社会的な意識の鋭い、社会の中における人間を描く近代小説的なものがあまり育っていない、ということとも関係があると思います。若者だけでなく、日本文化の問題かもしれない

です。でも、すごく大きな問題です。

それから、小出さんの方のお話。『坊ちゃん』の話は極めて面白い発想の転換、アイデアだと思いますね。論考をまとめられると、日本の学会にちょっと大きな反響を呼び起こすんじゃないかと思います。学会に刺激を与えるというのも、知の自由な運動だと思いますので。文学作品には秘められた仕掛けがあって、見抜く力が必要になってきます。

● 亀山

ありがとうございました。今の林先生、沼野先生の話を受けて、今度は小出さんの方からぜひご発言いただければと思います。

● 小出

まず林先生のデータを見て、日本はOECDの中ではほとんど最下位ということですが、新聞購読とよく似ていますね。購読者は高齢の人が多く、若年層ほど低い。環境問題とか国防とか、そういう問題をまじめに書いているメディアは新聞だと思うが、新聞がだんだん読まれなくなっているというのと似てるなと思いながら拝見していました。

それから他者への想像力というのは、本当に日本人というのはもともと社会的には関心がないんじゃないかという本質があるというテーマ。これは実は1970年代に東京で三菱重工ビルが大爆破され、大勢の人が地面に血だらけになった事件がありました。現場で取材していたロイターの記者が、日本人の特性を発見したと言うんです。一定の人には面倒を見るが、ほったらかしの人もある。日本人というのは、自分の会社の人、知っている人に一生懸命親切になる。知らない人は血だらけでほったらかしにしている。これは西洋では考えられないことだと、記事を打電したんです。これは非常に印象深い記事で、日本人は身の回りの人に対する親切心は非常に厚い。人の命は地球より重いというのが、命には人称があって、第一人称の自分の命が地球より重いのは昆虫だって知っている。第二人称の命は、家族とか恋人になるが、これを何とか助けたいというのは、動物もある。子供の命を助けるために、親が犠牲になる。問題は、第三人称の命だと思います。第三人称の命が本当に地球より重いと思って、本当に自らを捧げることができるかどうか。これは文化の問題とも思うし、ビル爆破事件で全く知らない人でも「大丈夫ですか」と言えるかどうか。70年代までの日本人はほとんどない、と嘆いた記事をロイターが書いたんです。

やっぱり第三人称の命に地球より重いという同感ができるかどうか。せめて2.5人称くらいまで心理距離を近づけるかどうか。これは教養、他者へ

の想像力の問題だと思います。アダム・スミスは『国富論』で、人間とは利己主義で自分勝手に欲望にしたがって行動すればいい、結果、神の見えざる手が働いて、経済が拮抗するのが自由主義と言っています。アダム・スミスの本業は実は道徳教育学者で、「道徳感情論」という本を書いています。『国富論』で自分勝手にやればいいと書いたが、人間にはもう一つ大切なものがある。それが想像力だということですね。屠殺場へ行くと次から次へと牛や豚が殺されている。牛や豚は自分の番がくるまで平然としている。想像力がないから。人間は拷問を受けている人を見ると、自分が受けているのではないのに、想像力によって、自分をその人の立場に置いてみるができるから、その場面を正視に耐えられなくなる。これが人間が持っている最大の才能である。これが道徳のすべての源である、と。自分勝手がいいと言った世界的な経済学者が言っているんです。本業にかえると、この想像力こそがすべての道徳の源泉である、と。

第三人称の命ということまで考えられるかどうかは、自分をその人たちの立場に置いてみるができるかどうかです。たぶん今、日本はかなり変わってきたと思います。東日本大震災でもこの地方の人と関係ない人はすごく多いですが、中日新聞に寄せられる義援金は90億を突破。朝日・毎日・読売の3大紙を合わせても75億円。この地方の人は、そういう想像力だけは負けないなという感じがしています。

第三人称の命に想像力によって手を差し伸べるかどうか、これはやっぱり教養の問題であるし、世界教養というのはそういう部分でもあるんじゃないか、という感じがしました。

同じように「自分勝手にいい」といったスミスが、本業にもとづいて『国富論』ができたというように読み直すと、また違った経済の姿が見えてくる、という感じがしますね。

あと、林先生のデータでグローバルに関する部分、ほとんど経団連のデータとか、ビジネス界から出ている用語ということで、ああそうだと思ったのは、アジアに対して日本人がとる態度は、明治になってからいち早く脱亜入欧したんですね。天皇は和服を着せず。天皇陛下は明治以来、絶対着物を着ないんです。天皇率先してアジアを脱して、西洋化をいち早く成し遂げた。それはアジアから見ると、ある種の裏切りなんです。脱亜だから。それから日本の経済が都合悪くなると入亜をする。日露戦争が終わってターゲットなくなったら日韓併合。アジアに入る。第一次世界大戦、大正デモクラシーでヨーロッパ、入米をしたりする。経済悪くなって、第一次世界大戦後、不況になると、大東亜共栄圏という新しい日本をつくる。結果的に戦争になって、負けて、また脱亜して入米。高度成長で東南アジアの市場が大事となると、

また入巫をする。

日本がアジアに入るときは、日本側のそろばんによって決めているんです。最近のグローバルがみんなそろばんの団体から出ているのが非常に印象的です。そろばんの団体から出ているグローバル化というのは、たぶん教養とは何も関係ない。金儲けの手段としてのグローバル化という感じがして、あまり長続きはしないだろうと思うんです。

アジアの人に入るときは、日本がそういう歴史を持っているという前提でアジアの人と付き合っ、初めて教養のある世界性が出てくるのではないかと、と思います。

● 亀山

非常に鋭い発言でしたね。日本人の教養は階層的な構造を持っていて、英語を学ぶのもいいが、日本語をしっかり学んで外国へ行けといったところにも、絶対通じる問題なのではないかと思うんです。

今話を聞きながら「他者への想像力」というところに問題が収斂していくなと思いました。教養教育によって、他者への想像力を育てていこうと、深く教養教育を考える立場からは思うわけです。しかし他方では、エンパシーなり、他者への想像力というものは、かなり素質的な側面もある。小出さんの他者への想像力という言葉の使い方と、沼野先生の使い方の違いもあるでしょう。どう定義しますかという問いには、林先生からも別の答えがかえってくるでしょう。つまり素質の問題というのも少なからずある。素質を豊かに持っている人ならば自分の中にそういった力を感じ、自分なりの知的な好奇心と結び付けていくことができる。それができない学生や子供たちはどうするのか？ それが教養教育に与えられた最大の課題の一つなのかな、と今お話を聴きながら感じたところです。

また、グローバルという言葉自体が受け付けないという林先生の言葉。"Global human resources development"を「グローバル人材育成」みたいなことを言うわけです。ヒューマンリソースは人材と訳されるかもしれないが、人的資源ですよ。つまり量的な側面で人間というものが見られている。日本の国益からの人材育成。金にならなきゃならない人材育成というところに、非人間的要素が既に入り込んでいる。これをどういうふうな教育というオブラートに包み込むかということに話が移ってしまいかねない危険性がある。そこで、私なりにグローバル人材というのは使うのはやめようということなんです。

例えば "Truly global citizen" という言葉ですね。真の意味での、グローバルマインドを持った市民。そういうモラルを持った市民が、グローバルな場

面でビジネスにかかわっていかうと。そのときは確実に自と他の問題をしっかりとわきまえて、自国のエゴを追求するのではなく、都合のいい恣意的な脱亜入欧を繰り返すのではなく、もっと根本的なところでの共存という考え方にたつてビジネスが行われることが必要だと思うんですね。

最後にあらためてお3人から補足的にでもお話をいただき、質疑応答へと移りたいと思います。まず林先生の方からお願いします。

●林

ひと月くらい前、新聞に亀井静香氏の談話というのが載っていたんです。「今の時代、欲望だらけで、金よ金よの利益追求が極大に達している。新自由主義なんてその最たるものだ。政治家もその渦に巻き込まれている。そこで行われるのは事なかれ主義。世の中をどうにかしようなんて強烈な意志を持ったやつなどいなくなった。体制に順応し自分の利益を守ろうとする」。こういうのを、あの亀井静香氏が書いていたんですね。へえ、こんなことを書くんだと。だいぶ歳をとってられるから、そういう心境になったのかなと。こんなふうに感じられるのは、ちょっとほっとしますよね。教養教育を考えるとときに、どういう意識の違う学生がいようが、そのすべての学生とともに何を議論していくのか、どういう視点を据えるのかということで最近私が言っているのは、大学教育の多くの局面でいわれることは、学生諸君にはせいぜい5～10年先のことしか見えていない。卒業したらどうするのか、どんなようになれるのかで、意識のほとんどを占めてしまう。政治経済の状況でいわれていることも5～10年程度。しかし、われわれが教養として考えるのは、50年、100年先の世界、地球がどうなっているのか、どうあってほしいのか。それを思い描くことが一番基本的な視点として必要ではないかと思うんです。コンビニや100均の教養でなく、本当の教養、文化文明を踏まえた言葉・発想を発露できるものを持っていることが必要ですね。具体的に起こってくる問題に即して、学生諸君と語るができるといい。そんなふうにあります。

●亀山

ありがとうございました。では、沼野さんのほうから。

●沼野

それでは短く2点ほど補足を。一つは、エンパシーという言葉。これは共感とか感情移入という言葉なんですが、想像力の問題でもあるが、言語の問題でもあるんです。最近、アメリカの言語学者とエンパシーの話をしたことがあります。心理学的、あるいは肉体的にエンパシーの度合いが計れ

るというんですね。つまり、ある人が大げがをして痛い思いをしたという話をした場合、それを聞いている人の筋肉とか電流の動きというものが非常に動く。ある人が手を動かしたら、聞いている人もそっちの筋肉が動きそうになる。それがエンパシーの強い人というんですね。そうじゃない人もいる。だいたいの女性のほうがエンパシーが強いと言うんですが。

人の話を聞いて、人を見て、自分のことのように感じとれる能力。亀山学長の言うように、資質の問題もあるけれど、言葉を聞いてさえも、それが自分のことのように思える想像力は、これはある意味では言葉の問題でもあるわけです。

他人の痛みを自分のものとして感じ取れるためにはどうしたらいいかというと、他人に対して興味を持ってないとダメ。先ほどの林先生の話にもありましたが、どうも自分のことしか興味がない。他人に関心が持てない。外国人に対しても、自分のまわりにいる第三人称の人にも関心持てないとエンパシーの持ちようがない。そこが問題。エンパシーとは言葉の問題でもあると思うんです。

もう一つ、グローバルという言葉、ここにいる人皆好きではないと思いますが、私もそうですが、亀山学長もいろんなところで使わざるを得ないという状況はあると思いますが、やっぱりなるべくカタカナ英語は醜いからやめようという方向で意識的に頑張らないと、どんどんカタカナ英語ばかりになってしまう。これは言語的な違いもありますが、中国語はカタカナ英語みたいに音だけとって、それを漢字にあてはめてということは、普通やらないらしいです。グローバルという音に近い漢字を当てはめることはしない。例えば「全球的」とか。そういうふうに全部意味をとって訳してしまう。本当にあまりカタカナ英語に踊らされないほうがいいです。

グローバルというのは球体ですよ。地球のことを球体と考えて「世界的」「地球的」という意味なんでしょうけど。"Global human resources" というのは、日本で際立って目立って使われる言い方なんですね。アメリカでは「世界の何々」とか「グローバルな人材」とか、そもそもあまり言わない。なぜ言わないかというと、自分たちの優秀な人は即世界だと思っているから、言う必要がない。だから逆説的なことなんです。グローバルな何々とか、世界の何々とか、ことさら言い立てるのは自分が本当に世界の一部に入っていない意識があると思います。

東大で広報委員をしたとき、英語のホームページを充実させようということで、例えば「世界の東京大学」というように言いたい。日本語ではなんとなくカッコよく聞こえるが、英語で「世界のオックスフォード、ハーバード」なんて聞いたことがない。そういう必要がないから。

英訳してみたら "The world's university of Tokyo" で、直訳ですが、英語だとまったく意味が分からない。発想を変えて例えば "One of the leading university of the world" とかね。そういうふうに言わないと、ほとんど意味が分からない。世界の何々という発想自体、実はなかなか通じにくいんです。

例えば「この学者は日本だけでなく、世界でも有名な人だ」ということもよく言いますが、日本は世界の一部ではないことを前提にもの言っているようなところがある。

グローバルとか世界という言葉を使うときは、自分が世界の一部じゃないことを自認しているようなものになってしまう場合が結構多いので、その点は用心した方がいいんじゃないかと思います。

● 亀山

ありがとうございました。次に最後ですが、小出さんのほうからお願いいたします。

● 小出

私からも2つ気が付いたことを。ずっと40数年新聞づくりをやっていて、つくづく思うのは、時代はくるくる変わっているとよく言われますが、実はニュースの99.9%は必ず過去に同じような例があるというのが私の経験則です。ニュースというのはほとんど登場人物の名前と場所が違うだけで、同じことが繰り返されている。原発事故だって、チェルノブイリからスリーマイルまで、同じことなんですね。ということは人間がニュースを作るわけだから、人間というのはほとんど変わらない、99.9%変わらない、1000年たっても変わらない、だからカラマーズフが私はすごいと思うんです。

私は、教養の基本は時代遅れかもしれませんが、私の個人的趣向では、まず古典だと思いますね。まず古典を身につけることで、人間がいかに変わらないかということを知ることができる。変わらないことが書いてあるから、長い年月にも耐えられた名作になる。時代を超えた名作というのは、まさにその「人間って変わらないんだ」といういろんな要素をちゃんと分かりやすく説明している。これが古典文学だと思うんです。

時代遅れで古いと言われますが、新聞社で生きている限り、若い記者でも古典をしっかり読み込んだ記者は、本当に伸びる。変わらない部分をしっかり押さえているから、変わったところの特質を非常に多角的にとらえることができます。それが分からない者は、変わったことに慌てふためいて、大変大変と言っているだけ。そういう記事はいっぱいある。

一つは教養ということを考えると、極めて古臭いだろうが、やはり古典をしつかり読み込む。これに勝るものは私はないと思います。古典読んでない学生は単位なしとか、それくらいの宝石箱だと思います。人類は19世紀に生まれたわけではない。はるか昔に生まれ、すでに亡くなった人に僕らよりはるかに優秀な人がいっぱいいることを若い人に教えなければダメ。今生きている人間が一番優秀なんてとんでもない。そういう意味で私は、古典を新聞づくりの経験則から、ぜひ変わらない部分を教えてくれる古典を若い人たちにしっかり極めていただきたいです。

もう一つは、私は、日本人はものさし一本主義だと思います。何でも一本にしたがる。いろんな物差しで世界の人は生きているんですよ。例えば私が高校時代までは尺貫法でした。背の高さは5尺7寸。体重は16貫500とか。昭和30年代半ばか後半に、お国が罰金付きでこんな物差しでは世界に通用しないと。全部メートル法にすると行ったんですね。これで世界国家になったかと思って、一番国際的なイギリスやアメリカに行くと、メートル法は何も通じない。長さの単位はインチであり、フィートであり、ヤード。スーパーに牛肉買いに行ってもグラムではない。何ポンド何オンス。ガソリンスタンドに給油に行っても何リッターではない。ガロン。彼等は彼らの尺貫法で堂々と生きているわけですよ。メートル法がいるんだったらそれにプラスするんです。物差しが多いほど先進国だと。なぜか日本というのは物差しを一本にしたがる。元号が古臭いから西暦一本がいいとか、とんでもない。イギリスにいったらエドワーディアンとかジョージアンとか、ビクトリアンとか、ごく日常の用語で明治大正昭和みたいなものがあるし、イランに行ったらカレンダー4種類ある。スンニ派とシーア派。ゾロアスター教の西暦のカレンダー。クリスマスだってロシアの統合正教は1月6日か何か。12月25日は西ローマ帝国だけ。世の中はいろんな物差しで動いていて、なぜ日本だけが西暦一本にしなきゃいけないと私は思うんです。物差し一本にしないと落ち着かない民族なんですよ。いろんな物差しを認め合うということが、世界教養の第一歩ではないか、と思っています。

● 亀山

ありがとうございました。教養論から日本人論、さらに最終的には、ダイバーシティに対してどう開かれているかということが、世界教養の出発点になるんだ、というそういうご発言でした。率直な言葉で言いますと、いいことおっしゃいますね、という感じです。

時間は限られているんですけども、会場の方からも質問をぜひお受けしたいと思っています。挙手をお願いします。

●会場質問者1

今日非常に参考になりましたが、話す内容がないのに英語だけしゃべっているということ。こういうのはもう意味がないと。ところが、その人達は、実はまだ英語を習っていないわけでもありません。今日本人の半分以上は多分日本語でも話す内容がないです。そうすると、これは英語を習う必要がないという、ミスリードをすると思うんですね。つまり、もっと教養教育、中等教育をしっかりとしなさいという話で、必ずしも英語が悪いわけではないということだと、僕は思っています。

それともう一つは、先ほど例えばイギリスに英文学を学びに行き、自分はシェークスピアかなんかをしゃべりたいけれど、いろいろと日本文学について聞かれたと。あるいは林先生もアメリカだと思いますけれど、自分がいかに知らなかったか気づいたと。そういう意味では私は、ほんとの教養は知らなくてもいいと思うんです。つまり、海外に行くなら、日本文学ぐらいは勉強していけというのがありますけれど、無くてもいいんです。けれど、英語を勉強して海外に行って自分がいかに知らないかを知って、そこで自分が次に何をするのかを考えるのが教養だと思います。そういう意味で皆さんのおっしゃっているポイントはまさにその通りですけれど、それが、英語を学ぶことが必要ないというミスリードだけは、ちょっと私は少し気をつけていただきたいと思います。あとは非常に私は納得しました。

●亀山

英語は前提だと思います。その上での話ということですね。英語を話したいという欲求に向かわせていくのが教養だと思うんです。その最初はやはり共通知で、共通知を共有できる喜びが英語というところに向かっていくんですね。共通知を育てていないので、まだ英語に向かうという方向性が、本当の意味付けが与えられないというところがあります。やはり根本的なところでの共通知を育てる。そこからスタートだと思います。

●会場質問者2

名古屋外国語大学で2006年から教えています。本業がジャーナリストです。26年間アメリカに暮らしまして、アメリカをベースにして世界中を歩いてまいりました。2006年に本学からお呼びがかかって、ここで教えるということになったときに、私が考えたことは、小出さんもおっしゃったダイバーシティという問題ですね。この世界というのは、非常に多様な中で動いていると。これをとにかく学生に植え付けたい、ということでした。そこからいわゆるエン

パシーというものも生まれてくるわけだし、もっと言えば大局観ですよ。この地球という、グローブというものがある。それを、そのバースアイビューで見られる、そういうその円満な素養というものを学生に身につけてもらいたい。ということで、そういう覚悟を持って、クラスを始めたわけですが、40数年間、日本の大学と全く縁の無いところで暮らしてきて、帰ってきて一番びっくりしたことは、例えば一般教養科目でも、半年なんですね。その講義に充てられた期間というのが。私が大学にいた頃というのは、通年履修でありました。社会学であれ、政治学であれ、法学であれ、全て通年履修であったわけです。それが例えば、私が今一つの講義で「国際社会の仕組み」というクラスを持っていますが、私は「国際関係論」だという受け止め方をしてやっているんですが、半年では何にも教えきれないという異常に大きいフラストレーションを感じております。こういう半期ごとに全て一つのクラスを終えてしまうという、こういう大学のあり方について、いかがお考えなのかということ伺いたいと思います。

● 亀山

はい、これは林先生の方からお願いします。

● 林

半期になったのは、やはりグローバル化なんですね。海外からの留学生をたくさん受け入れるために、海外とのテンポを合わせなきゃならない。秋からでも入学が可能になる、というようなところから起こってきた問題です。

ただ、通年科目、今まさにおっしゃいましたように、足りないという感覚ですね。私自身随分思っておりましたが、今はそれを完全に切り替える意識になっております。それはなぜかと、比較的、年配の教員はこれだけは教えたいと一生懸命教えようとするわけですね。しかし、学生諸君がそれをどう受け止めているかということを考えたときに、どうしてもそここのところにギャップを感じる事が非常に多いものです。これはもちろん、教養教育に限った場合です。学生とのギャップ、対話をできるようにするためにはそうとう絞らなければならない。具体的な内容、何を材料にして学生と対話するかを精選して、どう対話できるかということに照準にして私たちがやるかということ、教養教育の重要な方法だと思っています。その部分はちょっと見方が変わってきていると私は感じております。

● 亀山

沼野先生の方からもお願いします。

●沼野

東大で秋入学やろうとしているのも同じ理由ですね。海外との留学生・研究者の交流をやりやすくする、より活発にするために、海外の学年歴と合わせようというのが非常に大きな理由です。国際化の推進のために。それをやると教育上混乱を生じるということで、現実的に本当にできるのかという疑念が教員サイドから強くあり、新聞で報道されました。今は少しペンディングになっていますが、その代わり、1年を4学期制にするという話も出てきました。知らない間に執行部が決めて、すぐにでもそうなりそうなんです。4学期にきめ細かくすると、それだけさらに海外との学生交換・留学がしやすいというのが理由のようですが。

つまり Semester 制、1年2学期にただけでも細かくなり過ぎて、ちゃんと教育ができないという先生がいる一方で、1年を4学期にせよというスゴイ話も出てきている。これはかなり早い時期に東大はやると思う。全国に波及する可能性はありますよね。

●亀山

学生の皆さんもいらっしゃるので、どなたか一人、学生の方から何かございますか？

●会場質問者3

名古屋外国語大学の3年生です。先ほど林先生のデータで、日本人は全然ものを知らないように見えたのですが、「知っている」「ある程度知っている」という欄を合わせると、外国とさほど数値的に変わらないようにも見えました。防衛と教育については、日本人は少なかつたと思いますが。それ以外のところは、一概に興味がなく、知らないというようには言えないのではと感じました。「知らない」と答えているのが、日本人が一番少なかつたですよ。日本人はちょっとでも説明できなくなると、すぐ知らないと思ってしまう国民性もあるかと思ひまして。どのようにデータがとられたのかな、と思い、手を挙げさせていただきました。

●亀山

非常にすばらしい指摘です。林先生、お願いします。

●林

どういうやり方をしているかは、詳細はほとんど載っていないんです。ただ、20年くらい前から傾向はずっと変わってなくて、調査の仕方によっては、

やっぱり OECD の中では最下位になるのが、国際的にも話題になっているんです。現実には学生と話をすると、そのことが実感として感じられるんですね。長い経験をしているものですから、ここに一つの傾向があると示せると言うんです。

● 亀山

今日は名古屋学芸大の学長の井形先生がこちらにお越しです。一言お願いします。

● 会場質問者3 (名古屋学芸大 学長)

今日はおおいに勉強になりました。ありがとうございます。よりベラルアーツの教育のときは、旧制高等学校が良かったという評価があるんですね。旧制高等学校は、寮とか、連帯感が大きなあの力を発揮していたように思えるんですね。そういう意味では、やっぱり、学生のサークル活動とかですね、学生の日常生活。例えば英語なんかは大学でどういう英語を教えるかということは大変ですけども。それ以外に日常生活で学生がどういうふう英語をアプローチしているかというね。そんなことも大事じゃないかと今日感じました。

● 亀山

学生の営みと集団の中での学びが非常に重要な意味を持っているということですね。今日、皆さんがこの会場にお入りになる前に、モーツァルトの「魔笛」オペラの第一幕を見ていただきました。それから最後の15分はベートーベンの「フィデリオ」というオペラの序曲を聴いていただいたのですが。それは今日のパンフレットに書いてあるエッセイで紹介した音楽だったんです。

他者への想像力、エンパシーを常々言いますが、その原点に、自分の中に非言語的体験としての音楽があり、英語が好き、得意とはまったく別のところで、何か人間の喜怒哀楽のある根本的な部分を経験したという思いがあります。そういう意味では、ことによると、偏った教養教育をうたっているかもしれません。しかし、これから外国語学部で提言・提示したい、アピールしたいと願っている「世界教養」の考え方も、人文科学的に偏った教養スタイルかもしれません。たしかにそういう懸念もありますが、さまざまな批判を飲み込みつつ、息長く新しい教育カリキュラムをつくっていききたいと思っています。

世界教養って何だろう、国際教養として今人気ある学問体系とどう違うか、一言、私なりに言っておきたいなと思うのですが、「世界の多元性に立脚した」という、その一言しか言えないんですね。グローバルという言葉、

国際的というイメージが持つ運動体としての方向性ではなく、それぞれの多元の中に上からスツと入っていけるような学びのあり方。そこに他者への想像力というものを、世界教養という考え方の中に入れ込まなければならない。そうでなければ教養の形として成り立たないという側面を持っていることを知っていただきたいと思っています。あらためていつか、いろんな場で、世界教養のあり方、外国学の新しいあり方として、議論なり、自分なりの新しいメッセージを伝えていきたいと思います。

最後に紹介したいのですが、東大の斎藤兆史というイギリス文学の先生がシェークスピアの本を書いています。シェークスピアは古い教養の形に通じるやり方ですね。その彼が教養とは何かをめぐる本を書いている、3つの教養の柱を提示しています。第一が知的技術、情報処理能力である。新しい21世紀的な教養知のあり方として。2番目がバランス感覚。センスオブプロポーション。3番目は人格の理念であって、それはまた、善、よくなろうとする祈り、ここに教養知というものが集約されると、非常に良い言葉を出されています。ただし、これはイギリス文学者の教養論だな、と思うところもあるんですね。イギリス文学を学ぶ中で培われた、ある種の偏りとでもいうか、それは私が長くロシア文学にかかわりながら得た教養知というものの偏りと、どこか似ているところがある。だから教養を考える場合、常に自己がモデルになるということに限界があって、やはり他者が教養をどう考えているかをしっかり受け止めることによって、本当の意味での教養の新しい形を模索していかなければならないと痛感するわけです。

今日は領域の異なる3者からさまざまな形の教養のサンプルをいただきました。これから名古屋外国語大が新しい時代を迎えるにあたっての貴重なご提言ということでありがたく頂戴したいと思います。今日は長い時間ありがとうございました。

<司会 中山知佳 氏>

小出様、沼野様、林様、そして進行の亀山学長、どうもありがとうございました。

これもちまして、名古屋外国語大学主催、文部科学省・中日新聞社後援によります、名古屋外国語大学創立25周年記念シンポジウム「グローバル時代の教養——“WORLD LIBERAL ARTS”の地平へ」を閉会いたします。本日は誠にありがとうございました。

Essay



何よりもまず……

世界教養(World Liberal Arts)をめぐるメモランダム

名古屋外国語大学長 亀山 郁夫

音楽を、こよなく愛している。だから、フランスの詩人ヴェルレーヌの次の言葉がとても好きである。

「De la musique avant toute chose! (何よりもまず、音楽を)」。

若い頃、世界は音楽でできている、と真剣に思った一時期がある。それほどにも音楽に魅かれ、音楽をとおして悦び、悲しみ、孤独、憧れを経験してきた。戦後まもなく生を受けた団塊世代の少年にとって、音楽はまさに生きる糧そのものだったのだ。

ベートーヴェンの序曲「レオノーレ」3番をご存じだろうか。中間部に鳴り響くトランペットのファンファーレと流れるようなフルートのパッセージ……しかし、このまま好きな趣味の話を続けるわけにはいかない……

ロンドン行の機中にて

八月の終わり、イギリスの大学を訪問するために成田を飛び発った。飛行時間およそ12時間。気の遠くなるような機内での時間をどう過ごしてよいかかわからず、PCを開けては、あてなくエッセーをつづってみたり、備えつけのモニター画面で映画を楽しんだりしたが、そのうちそれらのすべてに飽きて、ただ目を瞑るほかなくなった……

「日の出る国」日本——。私は、この「日の出る」という形容詞がとても好きである。でも、遠い。憧れの国々から何と遠く隔たっていることか。にもかかわらず、明治以来、日本人は、ほとんどけなげといってもよいほど「西欧」を追い求め、追いつこうと努力してきた。そしてある時には、「ジャパン・ア

ズ・ナンバーワン」と恐れられるまでに成長した……。

思うに、1990年代前半の日本におけるバブル崩壊と、世界のグローバル化への引き金となったソ連崩壊は、軌を一にしていたのではないだろうか。そのとき、日本語とロシア語が、まず敗者の運命をたどりはじめた。以後、私たちは、長期にわたる経済停滞の淀みのなかであがき、明日の見えない日々を過ごしてきた。

日本自慢の科学技術も、いつしか「ガラパゴス化」の穴にはまり、少なからぬ部分で国際競争力を失った。では、この日本に、いつの日か、再浮上の時は訪れるのだろうか。浮上は、おそらくあるだろう。しかし栄光の時は、もはや二度と訪れないような気がする。これからの日本は、中国という「巨人」の影をつねに意識しつつ、自らの立ち位置を神経質に見極めながら、歩み続けていかななくてはならない。そうした状況のなかで、「日の出る」国が孤島とならないために残された選択肢は、決して多くない。それがいかに月並みな響きを奏でようと、「グローバル人材」の育成は、国家的な使命なのだ。

「グローバル」に乗り遅れる

イギリスでは、ロンドンにあるSOAS(School of Oriental and African Studies)とバークベック(Birkbeck)の二校を訪ねた。交流の可能性を打診するのが目的だった。イギリス唯一の「外国語大学」であるSOASは、私にとって憧れの大学である。だから、旧知のP・ウェブリー学長との懇談にも、かなり緊張して臨まざるをえなかった。他方、社会人向けの大学Birkbeck校は、知人の紹介ということもあって気易く訪問できた。が実は、こちらの大学に、人知れず苦い思い出があり、受付のあるガラス張りの建物に入るときはさすがに複雑な思いを拭えなかった。

今から十年前の2004年、同校で開かれた日露戦争100年にちなむ国際シンポジウムでの話である。ある親しい友人の代役として急ぎょ参加を決めた私は、40分に及ぶ基調講演を英語で行った。用意した原稿は、とくに困難もなく読みあげることができたが、残された15分間の質疑応答が、鬼門だった。会場から出たいくつかの質問に何ひとつまともには答えられず、恥ずかしい思いを抱いて帰国した。顧みるに、このシンポジウムは、自分が、グローバル化する時代の流れに、最低10年は遅れていると自覚させられた貴重な機会だった。おそらく、その遅れを取り戻すべく、すぐにでも努力を始めるべきだったのだろう。しかし、人生に二股はかけられない。その後まもなく、同じ親友の計らいで、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』の翻訳に取りかかることになって、その後3年、私は、どっぷりとロシア語に浸かりきる日々を送った。翻訳の仕事は、それなりに満足のいく結果を生んでくれた。だが、世界のなかで仕事をしているという実感はなく、時代からますます取り残される自分に焦りを感じつつけていた。そしてついに来るべき時が来て、今、遅まきながらも、かつて経験した10年いや20年の後れを克服すべく奮闘中である。

世界は英語で?!

正直言えば、私にも、むろんロシア文学者としての意地があった。そのため、公共圏(学長)での私と、私圏(ロシア文学者)での私との間に生じた亀裂に苦しんできた。国家規模で展開されている「グローバル人材」育成に、一文学者として少なからず違和感を覚える一方、日本が今後歩むべき道は、そこにしかないという強い思いがある。しかし、ジレンマを抱えたまま、「二重言語」を操作することは許されない。そのジレンマを自分なりに解決する努力を怠るとしたら、大学の現場にある一

教育者として著しく誠実さを欠く。現に、学生たちの英語に対する要求は強く、日本を代表するいくつかのグローバル企業では、社内の公用語を日本語から英語に切り替えている。ああ、世界は英語でできているのか！

私圏における私の切実な叫びを、内田樹氏に代弁していただく。

「今後、地球レベルでのさまざまな問題を解決するために必要とされるのは、《英知》

であって《英語》ではない。英語で発言できる人間以外に参加資格を認めないというルールは「英語を母国語とする話者」に、国際社会でのデジジョンメイカーとして圧倒的なアドバンテージを認めるということを意味するが、これはアンフェアだ」

正論である。本来なら、こうした「アンフェア」な状況は何としても解決されなくてはならない。内田氏のような卓越した知性の持ち主なら、ほんものの文学が要求するレベルのコミュニケーションを実現するのに、生半可な語学力ではとうてい不可能という思いがあつて当然である。しかし、「グローバル人材」の育成という国家的な目標に、私自身、ある種の別な可能性を感じとっている。そしてその根底には、自己表現そのものへの止みがたい欲求が息づいているのを感じる。一ロシア文学者として得た学問上の発見を、自分がこれまでの人生で経験できた喜びを、「普遍的な」言語で世界の人々に伝えたい。むろん、ここで言う「普遍的な」言語とは、英語である。そして世界の人々に伝えたいという願望は、どこか音楽的な理想に由来しているような気がしてならない。ことによると、大好きなベートーヴェンの「第九」に通じる理想主義的な何かに……



モスクワ、ヴァイツォキーの家にて

エンパシー、または、心優しい……

名古屋外国語大学の学長として私が主張しているのは、「心優しい」グローバル人材の育成である。カッコでくられるのは、グローバル人材ではなく、「心優しい」という形容詞のほうである。私の耳に、「グローバル人材」(Global Human Resources)という言葉は、どことなく非人間的に響く。それよりもっと人間的で、柔らかな表現はないものだろうか。例えば、「真にグローバルなマインドをもった人(間)」(Truly Global Human Beings)は、どうだろうか。

では、「心優しい」とは、どういう意味なのか。

日本社会は、今後ますます成熟の度を加えていく。世界から期待される役割も、ある意味で、成熟した大人の、成熟した「先行者」としてのそれとなるはずだ。その役割は、世界に向かって、文化的に開かれた優しい知性と教養をもつ人間が果たすべき役割だろう。私は、そうした知性と教養にあふれた人間が、グローバル社会に乗り出していくことを切に願っている。そのとき初めて、「フェアプレー」の精神が生きるグローバルビジネスも可能となる。グローバリズムが、ハゲタカの貪欲さを弁護する思想となってはならない。他者の幸福、他者の繁栄があつて、初めて自分の幸福、自分の繁栄があるという認識に立てる人間、それこそが成熟した「真にグローバルなマインドをもった」職業人である。そして、そうした彼らの『マインド』の根幹をなすものが、「エンパシー」(Empathy)、「共感力」「感情移入力」の意味)なら、逆にこの「エンパシー」を培うものが教養ということになる。

私たちの名古屋外国語大学では、今、「世界教養」(World Liberal Arts)という新たな理念のもとに、次世代型の教養教育を構想中である。最終的な目標は、むろん、「エンパシー」の心にあふれる「世界教養」人ということになる。こうして教養は、たんに人間の精神をバランスよく

機能させるビタミン剤のようなものから、人間の血肉そのものへと変容する。

「世界教養」のカリキュラムは、けっして複雑ではない。英語をメインに二つ以上の外国語を学ばせ、日本を含めた世界諸地域の文化や歴史に通じ、なおかつ世界市民として良識ある行動をとれる人間を育てることを目的とする。論理的思考、日本人としてのナショナルなアイデンティティなど、めざす柱はいくつかある。しかし、くどいようだが、すべての根幹にあるのは、「エンパシー」の精神である。だから、人文学の学びに最大の重心が置かれる。今日、グローバルビジネスの世界で活躍しているのは、経済学や法学など社会科学を中心に学んだ学生だけではない。文学や芸術に広く通じた教養人も、世界を舞台に幅広く活躍している。彼らが身に着けた人文学的教養ゆえに逆に尊敬を勝ちえ、世界を動かす職業人となった例はいくつもある。教養こそは、最高の実学なのだ。いや、最高の就業力と言ってもよい。いや、そればかりではない。長い人生を実り豊かににまっとうするために最大の糧となるのも、教養である。そして今、私たちが模索している「世界教養」とは、21世紀グローバル時代を生き抜くための知恵となり、力そのものとなる21世紀型の教養である。

「世界は教養でできている」

今、私の執務室の机の上に、つい先日、親しい友人から送られてきた論文の抜刷と、NHKラジオテキストが二冊載っている。抜刷の表紙に記されたタイトルは、“Shifting Borders in Contemporary Japanese Literature: Toward a Third Vision”。他方、NHKテキストの表紙には、「英語で読む村上春樹」と書かれている。著者である「親しい友人」とは、かつて2004年、ロンドン大学での国際シンポジウ

ムで私がおその代役を務めた友人であり、私がドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』を翻訳するきっかけを作ってくれた恩人である。現在、東京大学大学院教授の職にあるその友人の名前は、沼野充義。日本ロシア文学会の会長を務める彼が、懇親会の席上でもらした一言が印象に残った。

「亀山さん、英語ってやっぱりそんなに重要ですか」

沼野氏は、東京大学大学院時代にフルブライト奨学生としてハーバード大学に3年間留学し、帰国するとまもなく東京大学に奉職した。それからすでに30年の歳月が流れたが、その間、スラブ文化全般の研究と紹介、日本文学の批評に残してきた仕事は、もはや凄絶としかいいようのない質と量を誇る。この間、彼の疾走ぶりを傍目で見つめながら、感じ続けてきたことがあった。

《この人は、グローバル化時代とか英語一元化など、まるで眼中にないのだ》。

その彼から送られてきた抜刷の論文とNHKテキストを手にして、私は軽いショックを覚えた。グローバル時代に20年遅れたと感じつづけてきた私とは裏腹に、彼はつねに最先端の学問的関心を辿り、世界の文学者との旺盛な対話をとおして、確実にその成果を教育の場に還元していたのだ。そしてその沼野氏が最近出した対談集もきわめて刺激的な内容に満ちていた。そのタイトルは、――。

『世界は文学でできている』――、

何というしたたかな自信に満ちたタイトルだろうか。

この対談集を読み進めるうち、私は、ある思ひかけない発見に導かれた。「世界教養」という理念が理想とする知性を表現しているものこそ、文学ではないか。文学こそは、世界が多元的な価値観から成り立っていることを明らかにする最後の唯一の証なのではないか、と。そして、この本のタイトルにある「文学」に、「教養」という言葉を置き換えてみたら、

私がいま、理想とする「世界教養」の理念をかなり効果的にアピールできるのではないかとさえ。人文学は、学問の王である。だから、何よりもまず人文学から始めなくてはならない。そして叫びたい。

「世界は教養でできている」と。

繰り返そう。教養こそは、人間の生命を感じとる感性にして想像力であり、あるいは生命力そのものである。しかし、ここまで来て、改めて振り返る。私はこれまで、「教養」という言葉を、いっさいの定義ぬぎで用いてきた。果たしてそのようなことが許されるのか……。許される！今はむしろ、あえてむりをして定義しないほうがよいのかもしれない。なぜなら、今日のこの記念シンポジウムでは、まさに「教養」をめぐる最終的な答えへのヒントが提示されるに違いないからだ。そこでは、また、私たちの名古屋外国語大学が構想する「世界教養」の理念が、人文科学、社会科学、自然科学の視点からより精緻に、かつ総合的に検証されるはずである。私は、これから、どんな批判をも覚悟してステージに立たなくてはならない。

最後に、今日の記念シンポジウムの講演をお引き受け下さった東京大学大学院教授、沼野充義さん、パネリストの中日新聞社代表取締役社長小出宣昭さん、京都三大学教養教育研究・推進機構の林哲介さんに、この場を借りて心からお礼を申し上げます。



亀山 郁夫(かめやま・いくお)

1972年東京外国語大学卒業、1974年同大学院修士課程修了。1977年東京大学大学院博士課程中退。1982年天理大学助教授、1987年同志社大学助教授、1993年東京外国語大学教授、2007年東京外国語大学長を経て2013年4月から名古屋外国語大学長に。ロシア文化やロシア文学を研究し、主な著書に「破滅のマヤコフスキー」「碟のロシアースターリンと芸術家たち」。翻訳書にドストエフスキー著「カラマーゾフの兄弟」など多数。

Nagoya University of Foreign Studies
名古屋外国語大学

